

後柏原天皇主催着到和歌の特徴

― 永正三年と永正十六年の着到和歌を事例に ―

辰
田
芳
雄

後柏原天皇主催着到和歌の特徴

— 永正三年と永正十六年の着到和歌を事例に —

辰 田 芳 雄

目次

はじめに

一 勝仁親王・後柏原天皇主催着到和歌の特徴

二 室町・戦国期禁裏着到和歌の江戸時代写本集

三 永正三年十一月九日起日後柏原天皇主催着到和歌の概要

(1) 詠者

(2) 歌題

(3) 原本と写本

(4) 特徴

四 永正十六年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌の概要

(1) 現存する原本と写本

(2) 詠者

(3) 写本と原本

① 四月十九日 (四十六日目) 雪中興遊

② 四月二十日 (四十七日目) 五月雨晴

③ 四月二十一日 (四十八日目) 千鳥曉鳴

④ 四月二十二日 (四十九日目) 照射

(4) 貞敦親王の詠歌についての検討

(5) 特徴

五 永正三年十一月九日起日後柏原天皇主催着到和歌の翻刻

六 永正十六年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌の翻刻

後柏原天皇主催着到和歌の特徴

— 永正三年と永正十六年の着到和歌を事例に —

辰 田 芳 雄

はじめに

着到和歌は、主に上巳の節供（三月三日）或いは重陽の節供（九月九日）を起日とし、その百日後に満日を迎える定数歌であり、十人前後の参加者が春・夏・秋・冬・恋・雑の部で構成される百首の兼題を詠歌し、自筆記録する文芸である。起日と満日は身分の高い順で記されるが、他の九十八日分は身分や臈次に関係なく、無秩序に記載されることに特徴がある^①。着到和歌は、特に後土御門天皇や後柏原天皇の時代に盛んに行われた和歌の形式で、後奈良・正親町天皇以後は衰退したが、江戸時代になり霊元院の時に再興された。禁裏では後柏原天皇（勝仁親王）主催の着到和歌が最も多く知られているが、兼題の和歌の他に当座や連歌の「着到」もあつたようである。

勝仁親王・後柏原天皇主催着到和歌の翻刻は、①永正六年九月九日歳中立春〜十二月二十日竹契還年、人数一六人（『後柏原院御日次結題』『続々群書類従』一四）、②明応二年三月三日早春〜六月十四日閑屋、人数五人（拙稿「明応二年三月三日起日勝仁親王主催着到和歌の翻刻」『岡山朝日研究紀要』三七、二〇一六年）、③永正二年三月三日都

鄙立春〜六月十四日社頭祝世、人数一一人（拙稿「永正二年三月三日起日勝仁親王主催着到和歌の翻刻」『岡山朝日研究紀要』三九、二〇一八年）がある。これらに続けて、本稿では、永正三年（一五〇五）十一月九日起日立春氷〜十二月十九日祝言（人数五人）と永正十六年（一五二八）三月三日起日歳中立春〜六月十四日社頭祝言（人数一〇人）を取り上げて、翻刻を行う。

一 勝仁親王・後柏原天皇主催着到和歌の特徴

後柏原天皇の定数和歌は、『列聖全集』^②御製集六に「御百首部類」としてまとめられている。①永正十年三月三日起日初春〜祝、②永正八年三月三日起日山早春〜寄神祇祝言、③暁立春・溪余寒〜寄水雑、④明応二年三月三日起日早春〜閑屋、⑤立春・海辺霞〜日吉、⑥永正二年三月三日起日都鄙立春〜社頭祝言、⑦永正十六年三月三日起日歳中立春〜社頭祝言、⑧永正六年九月九日起日歳中立春〜竹契還年、⑨文亀三年三月三日起日立春〜祝言、⑩文亀三年九月九日起日歳暮立春〜祝言である。このうち着到和歌として確認できるものは、①・②・④・⑥・⑦・⑧・⑨・⑩である。

さらに、後土御門・後柏原・後奈良天皇らの着到和歌などを調べてみると表1の如くである。後土御門天皇は一二回であるが、後柏原天皇は勝仁親王の時代には一一、天皇の時代には一〇、合わせて二一回ある。附録として足利義尚・尊敦親王・後奈良天皇主催着到

和歌も掲げた。この表1を見ると、後柏原院が最も多く、またその興行上での形式に工夫がなされ、変化に富んでいる。例えば、No 9は歌合、No 10は和歌ではなく連歌、No 20は歌題が兼題ではなく当座である^③。これらは、本来の着到和歌を変形したものであるが、上巳或いは重陽の節供を起日に数人が百日間にわたり詠歌する点では「着到」と呼んでもよからう。

No 15は起日が節供日ではなく、一日に二日分の詠歌があるなど極めて変則的であるが、一方、歌題は藤原為家が作成した百首題を採用している。また、No 21は歌題が宗尊親王歌合題ではあるが、春秋交互、夏冬交互、恋雑交互となっている点は着到和歌では新奇である。これが後柏原天皇主催着到和歌の最後である。このNo 15とNo 21を今回翻刻する。

二 室町・戦国期禁裏着到和歌の江戸時代写本集

室町・戦国期禁裏着到和歌の江戸期写本集は数種類ある。後土御門天皇主催着到和歌「文明十二年十月二十二日初冬時雨」十二月十一日祝言」・「文明十七年九月九日立春」十二月十九日祝言」を除き、その他はすべて勝仁親王・後柏原天皇主催のものである。実は、後土御門天皇主催の「文明十二年十月二十二日初冬時雨」十二月十一日祝言」の歌題は、後柏原天皇主催の「永正三年十一月九日立春水」十二月十九日祝言」と一致する。つまり、室町・戦国期禁

裏着到和歌の江戸期写本集は、勝仁親王・後柏原天皇主催着到和歌研究の基礎資料を集成したものといつてよいのではなからうか。

かつて私はこれらの江戸期写本集を紹介したことがあったが、浅学のために欠落や誤りを含んでいたので、改めて以下にⅠ～Ⅶとして紹介する。a～iの九つは年次順である。また、WEB上で確認できるものについては、読者の便宜のため、写本それぞれの映像のコマ数も記す。

Ⅰ 国立歴史民俗博物館高松宮家伝来禁裏本「禁裏御著到和歌」(H一六〇〇—三三三三ふ函八〇)、全161コマ

① g 永正六年九月九日歳中立春」十二月二十日竹契週年、一六人、3コマ」49コマ

② c 明応二年三月三日早春」五月十四日閑屋、五人、49コマ」68コマ

③ e 永正二年三月三日都鄙立春」六月十四日社頭祝世、一一人、68コマ」88コマ

④ f 永正三年十一月九日立春水」十二月十九日祝言、六人、88コマ」109コマ

⑤ h 永正八年三月三日山早春」四月二十七日暮秋紅葉、八人、109コマ」121コマ

⑥ i 永正十六年四月四日首夏」五月三日都鄙歳暮、一〇人、122コマ」132コマ

⑦ d 文亀三年四月九日早秋」五月十三日歳暮、一〇人、132コマ」142コマ

詠者
女房達はいつもの御人数。番衆ともに詠むべし仰せらるる。朝の御製ありてみせらるる。
勝仁・花山院兼子・万里小路命子・庭田雅行・松木宗綱・四辻季経・綾小路俊量・甘露寺元長・五辻富仲
勝仁・万里小路命子・勸修寺房子・四辻春子・四辻季経・三条西実隆・綾小路俊量・甘露寺元長・万里小路賢房
御製・勝仁・邦高・三条冬子・甘露寺親長・上冷泉為廣・三条西実隆・勸修寺政顕・姉小路俊量・田向重治
勝仁・邦高・道永法親王・常信法親王・就山永崇・宗山等貴
勝仁・尊敦・邦高・就山・庭田雅行・甘露寺親長・滋野井教國・四辻季経・三条西実隆・白川忠富・綾小路俊量・山科言国・薄以量・庭田重経・万里小路賢房・唐橋在数・五辻富仲・五条為学
勝仁・道永法親王・三条西実隆・四辻季経・甘露寺元長
御製・邦高・三条西実隆・四辻季経・甘露寺親長・勸修寺政顕・甘露寺元長・田向重治・万里小路賢房・姉小路済繼
御製・実隆・下冷泉政為・四辻季経・綾小路俊量・中山宣親・勸修寺政顕・田向重治・東坊城和長・冷泉永宣・姉小路済繼
御製・三条西実隆・下冷泉政為・綾小路俊量・小倉季種・田向重治・冷泉永宣・下冷泉為孝・甘露寺元長・姉小路済繼・上冷泉為廣
御製・邦高・綾小路俊量・東坊城和長・田向重治・冷泉永宣
御製・三条西公条（初度）・下冷泉為孝（初度）
御製・三条西実隆・下冷泉政為・小倉季種・甘露寺元長・田向重治・東坊城和長・冷泉永宣・広橋守光・姉小路済繼・三条西公条・下冷泉為孝・四辻公音・中山康親・甘露寺伊長・飛鳥井雅綱
御製・三条西実隆・下冷泉政為・小倉季種・甘露寺元長・冷泉永宣・姉小路済繼・中山康親
御製・三条西実隆・下冷泉政為・小倉季種・甘露寺元長・田向重治・飛鳥井雅俊・三条西公条・冷泉永宣・姉小路済繼・下冷泉為孝・四辻公音・中山康親・甘露寺伊長・飛鳥井雅綱
御製・知仁・冷泉永宣・三条西公条・四辻公音・鷺尾隆康・庭田重親
御製・知仁・貞敦・中山康親・武者小路秀房・冷泉永宣・下冷泉為孝・三条西公条・飛鳥井雅綱・上冷泉為和

詠者
御製・邦高・四辻春子・庭田雅行・甘露寺親長・四辻季春・滋野井教國・白川忠富・三条西実隆・綾小路俊量
御製・勝仁・邦高・三条冬子・四辻春子・甘露寺親長・滋野井教國・四辻季経・三条西実隆・甘露寺元長
御製・邦高・三条冬子・四辻春子・中院通秀・勸修寺教秀・徳大寺実敦・甘露寺親長・飛鳥井雅康・三条西実隆・滋野井教國・下冷泉政為・姉小路基綱・上冷泉為廣・小倉季熙
御製・大炊御門信量・三条冬子・中院通秀・海住山高清・甘露寺親長・三条西実隆・四辻季経・姉小路基綱・冷泉為廣
御製・勝仁・邦高・道永法親王・花山院兼子・四辻春子・庭田朝子・庭田重経・冷泉永宣・万里小路賢房・飛鳥井雅康・四辻季経・山科言国・田向重治・甘露寺元長

詠者
義尚・高倉永継・広橋兼顕・日野政資・上野刑部少輔・伊勢貞宗・星野宮内少輔・伊勢七郎・伊勢貞頼・安東右馬助・伊勢七郎次郎・小串次郎・埴和興次郎・安東平五郎・布施新三郎・夏阿弥・松阿弥・木阿弥・仙阿弥・大館治部少輔・杉原賢盛・杉原長恒
打聞衆（中院通秀・三条西実隆・姉小路基綱・杉原賢盛など）・宗山等貴・高倉永継・冷泉政為・日野政資・飛鳥井雅俊・伊勢貞頼

詠者

詠者

表1 後柏原天皇主催などの着到和歌一覧

●勝仁親王・後柏原天皇主催着到和歌

No	親王・天皇	起日	満日	人数	起日歌題	二日目	満日歌題	歌題構成	出典	原本	写本
1	勝仁親王	文明8年3月3日	(6月14日)	不明					実隆		
2	勝仁親王	文明9年3月3日	(6月14日)	不明					実隆		
3	勝仁親王	文明11年9月9日	11月20日	不明					お湯		
4	勝仁親王	文明12年9月1日	12月11日	9人	立春	山霞	祝言	20・10・20・10・20・20	実隆・お湯		
5	勝仁親王	文明15年9月9日	12月19日	不明					お湯		
6	勝仁親王	文明17年9月9日	12月19日	9人	立春	朝霞	祝言	為家百首題 (20・15・20・15・20・10)	実隆	△	○
7	勝仁親王	文明18年9月9日	12月19日	不明	初春 (弘長百首題)	霞	祝	弘長百首題 (20・10・20・10・20・20)	実隆		
8	勝仁親王	文明19年3月3日	(6月14日)	10人				一字題	実隆		
9	勝仁親王	長享2年3月3日 [㍿]		6人				春20・夏15 [㍿] 。歌合	実隆		
10	勝仁親王	長享2年9月9日	12月19日	18人				着到連歌	実隆・親長・お湯		
11	勝仁親王	明応2年3月3日	5月14日	5人	早春	憐霞	関屋	20・15・20・15・15・15	実隆	○	○
12	後柏原天皇	文亀3年3月3日	6月14日	10人	立春	山霞	祝言	20・15・20・15・20・10	実隆		○
13	後柏原天皇	文亀3年9月9日	12月19日	11人	歳暮立春	山霞	祝言	20・10・20・10・20・20	実隆		
14	後柏原天皇	永正2年3月3日	6月14日	11人	都鄙立春	社頭祝世	子日催興	20・15・20・15・15・15	実隆・二水	○	○
15	後柏原天皇	永正3年11月9日	12月17日	6人	立春氷	初春霞	祝言	為家百首題 (20・10・20・10・20・20)	実隆		○
16	後柏原天皇	永正5年9月9日	12月20日	不明					実隆		
17	後柏原天皇	永正6年9月9日	12月20日	16人	歳中立春	野外朝霞	竹契週年	20・15・20・15・15・15	実隆	○	○
18	後柏原天皇	永正8年3月3日	6月14日	10人	山早春	子日友	哥神祇祝	20・15・20・15・15・15	実隆		○
19	後柏原天皇	永正10年3月3日	6月14日	12人	初春	霞	祝	20・10・20・10・20・20	実隆	○	
20	後柏原天皇	永正14年3月3日	※6月16日	7人				当座10日分、春10	二水		
21	後柏原天皇	永正16年3月3日	6月14日	10人	歳中立春	六月立秋	社頭祝言	宗尊親王歌合題 (春秋30・夏冬30・恋雑40)	二水	○	○

●後土御門天皇主催着到和歌

No	親王・天皇	起日	満日	人数	起日歌題	二日目	満日歌題	歌題構成	出典	原本	写本
1	後土御門天皇	文明4年9月9日	(12月18日)	不明	立春	山霞	祝言	20・15・20・15・20・10	親長・紅塵灰集		
2	後土御門天皇	文明7年3月3日	6月14日	10人					実隆		
3	後土御門天皇	文明7年9月9日	12月19日	不明	立春				実隆		
4	後土御門天皇	文明8年3月3日	(6月14日)	不明	早春雪	狐嶋霞	寄国祝	20・15・20・15・15・15	紅塵灰集		
5	後土御門天皇	文明8年9月9日	(12月18日)	不明	立春	山霞	祝言	20・15・20・15・15・15	紅塵灰集		
6	後土御門天皇	文明9年9月9日	12月19日	10人					実隆		
7	後土御門天皇	文明10年9月9日	(12月19日)	不明					お湯		
8	後土御門天皇	文明12年9月1日	12月11日	15人	立春氷	初春霞	祝言	為家百首題 (20・10・20・10・20・20)	実隆・お湯	○	○
9	後土御門天皇	文明13年9月1日	12月12日	10人	立春朝など	立春山など	寄水祝など	20・10・20・10・20・20	親長・お湯	○	
10	後土御門天皇	文明15年3月3日	6月13日	不明					お湯		
11	後土御門天皇	文明15年9月9日	(12月19日)	15人		子日			東山御文庫	△	
12	後土御門天皇	延徳2年9月9日	(12月18日)	5人					実隆・お湯		

●足利義尚主催着到和歌

No	親王・天皇	起日	満日	人数	起日歌題	二日目	満日歌題	歌題構成	出典	原本	写本
1	足利義尚	文明9年9月9日	(12月19日)	22人	立春				兼顕卿記		
2	足利義尚	文明10年9月9日	(12月19日)	不明	立春	山霞			兼顕卿記		
3	足利義尚	文明15年9月2日	10月22日	20人	都立春・里霞 (二日分)	寄国祝言		20・10・20・10・20・20	十輪院内府記・実隆		

●尊敦親王主催着到和歌

No	親王・天皇	起日	満日	人数	起日歌題	二日目	満日歌題	歌題構成	出典	原本	写本
1	尊敦親王	文明18年3月3日	(6月14日)	不明		山霞			言国卿詠草		

●知仁親王主催着到和歌 ※後奈良天皇は上巳の節句は鶏合せ・重陽の節句は和漢聯句を恒例とする。

No	親王・天皇	起日	満日	人数	起日歌題	二日目	満日歌題	歌題構成	出典	原本	写本
1	知仁親王	永正6年9月9日	(12月19日)	不明	早春風	子日	寄日祝	20・15・20・15・15・15	貞敦親王著到百首和歌 (伏見526)		
2	知仁親王	永正7年9月9日	12月19日	不明					実隆・二水		
3	知仁親王	永正8年3月3日	6月14日	不明					実隆		

注) 満日の括弧書きは起日から百日目。※は百日目ではない。原本の△は、勝仁親王自筆の写本。

出典の実隆は『実隆公記』、親長は『親長卿記』、お湯は『御湯殿上日記』、二水は『二水記』の略。

○勝仁親後・柏原天皇主催の各着到和歌の特色

3は閏9月を跨ぐ。

4は後土御門天皇と同じ日程の9月1日起りで同時に興行。

7は弘長百首題で興行。

8は一字題で興行。女房の参加が見られる最後。

9は「被分左右云々」とあることから、歌合の形式を含む着到和歌として興行か。

10は着到連歌。形式不明。

11は閏4月を跨ぐ。

12は天皇として最初の着到和歌。

14は最初の百日四文字歌題

15は起日が変則的。閏11月を跨ぐ、一日に二日分の日が二度あり。後土御門天皇主催の4の歌題と同じ(為家百首)。

17は知仁親王主催が同一日程で興行。

16は三条西実隆の息公衆、下冷泉政為の息為孝が着到和歌に初参。

20は兼題ではなく当座、10日分を一日で読む。満日が二日ずれる。

21は歌題が変則的で、春秋交互、夏冬交互、恋雑交互(宗尊親王歌合題)。

⑧ a 文明十二年十月二十二日初冬時雨～十二月十一日祝言、一五人、142コマ～159コマ

※日一六〇〇—三三三ふ函八〇の解説には「時期…明応元・二・文亀三年、備考…三種の着到和歌を合写。(1)明応元年九月九日から十二月二十日 (2)明応二年三月三日から五月十四日 (3)文亀三年四月九日から五月三十日。宮内庁書陵部に「御着到部類」一冊(御所本、五〇一・七九七)あり」とあるが、誤り。

※国立歴史民俗博物館高松宮家伝来禁裏本には、「禁裏御著到百首」(日一六〇〇—二六き函二二)、全136コマ、永正十年三月三日初春～六月十四日祝、一二二人の原本あり

II 宮内庁書陵部「御着到部類」(五〇一・七九七)、全124コマ

① c 明応二年三月三日早春～五月十四日閑屋、五人、5コマ～25コマ

② e 永正二年三月三日都鄙立春～六月十四日社頭祝世、一人、26コマ～48コマ

③ f 永正三年十一月九日立春氷～十二月十九日祝言、六人、48コマ～68コマ

④ h 永正八年三月三日山早春～四月二十七日暮秣紅葉、八人、69コマ～82コマ

⑤ i 永正十六年四月四日首夏～五月三日都鄙歳暮、一〇人、83コマ～95コマ

⑥ d 文亀三年四月九日早秋～五月十三日歳暮、一〇人、96コマ～105コマ

⑦ a 文明十二年十月二十二日初冬時雨～十二月十一日祝言、一五人、105コマ～124コマ

※宮内庁書陵部には、b「文明十七年從九月九日着到百首」(一五五—二五八、公開画像なし、文明十七年九月九日立春～十二月十九日祝言、九人)あり

III 国立公文書館内閣文庫「著到和歌」(二〇一・一四六)全119コマ

① g 永正六年九月九日歳中立春～十二月二十日竹契退年、一六人、3コマ～64コマ

② c 明応二年三月三日早春～五月十四日閑屋、五人、64コマ～89コマ

③ e 永正二年三月三日都鄙立春～六月十四日社頭祝世、一人、89コマ～117コマ

IV 国立公文書館内閣文庫「日次歌集」(二〇一・六三三)、享保十七年

昌平坂学問所、外題「冷泉 日次歌集 全」、全98コマ

① f 永正三年十一月九日立春氷～十二月十九日祝言、六人、2コマ～28コマ

② h 永正八年三月三日山早春～四月二十七日暮秣紅葉、八人、28コマ～45コマ

③ i 永正十六年四月四日首夏～五月三日都鄙歳暮、一〇人、45コマ～58コマ

④ d 文亀三年四月九日早秋～五月十三日歳暮、一〇人、58コマ～71コマ

⑤ a 文明十二年十月二十二日初冬時雨、十二月十一日祝言、一五人、71コマ、94コマ

※国立公文書館内閣文庫には、b「着到和調」(文明十七年九月九日)「(二〇一—三九、文明十七年九月九日立春、十二月十九日祝言、九人) 107コマあり

V 宮城県図書館伊達文庫「近代著到和歌」

国文学研究資料館、紙焼写真請求番号C六三六七、226コマ

① g 永正六年九月九日歳中立春、十二月二十日竹契廻年、一六人

② c 明応二年三月三日早春、五月十四日閑屋、五人

③ e 永正二年三月三日都鄙立春、六月十四日社頭祝世、一人

④ f 永正三年十一月九日立春氷、十二月十九日祝言、六人

⑤ h 永正八年三月三日山早春、四月二十七日暮煖紅葉、八人

⑥ i 永正十六年四月四日首夏、五月三日都鄙歳暮、一〇人

⑦ d 文亀三年四月九日早煖、五月十三日歳暮、一〇人

⑧ a 文明十二年十月二十二日初冬時雨、十二月十一日祝言、一五人

VI 水府明德会水戸彰考館本「近代著到和歌」

国文学研究資料館、紙焼写真請求番号C七一〇二、176コマ

上巻

① b 文明十七年九月九日立春、十二月十九日祝言、九人

② c 明応二年三月三日早春、五月十四日閑屋、五人

③ f 永正三年十一月九日立春氷、十二月十九日祝言、六人

下巻

④ a 文明十二年十月二十二日初冬時雨、十二月十一日祝言、一五人

⑤ d 文亀三年四月九日早煖、五月十三日歳暮、一〇人

⑥ i 永正十六年四月四日首夏、五月三日都鄙歳暮、一〇人

⑦ 「夏冬三十首 年四月」

三 永正三年十一月九日起日後柏原天皇 主催着到和歌の概要

(1) 詠者

詠者は、御製、式部卿宮・邦高親王、按察使・綾小路俊量(正二位)、前源中納言・田向重治(従二位)、菅宰相・東坊城和長(従三位)、新宰相・冷泉永宣(従三位)の六人である。なお、田向重治の権中納言の辞任は、十月十九日である。写本では、それぞれ「式」「前源」³⁾「按」「菅」「新」の略称で記載されている。

後柏原天皇は、寛正五年(一四六四)十月二十日誕生、当時四十三歳。在位は明応九年(一五〇〇)十月二十五日(三十七歳)から大永六年(一五二六)四月七日(没)、六十三歳。諱は勝仁。歌集『柏玉集』がある。三条西実隆の『雪玉集』、冷泉政為の『碧玉集』とともに、三玉集と呼ばれた。

邦高親王は、伏見宮第五代当主。父は貞常親王。康正二年(二四五六)二月二日誕生。当時五十一歳。文明六年(二四七四)に元服、親王宣下。享祿五年(一五三二)三月十九日没、七十七歳。

綾小路俊量は、宝徳三年（一四五二）誕生。永正十五年（一五一八）没。六十八歳。当時五十六歳。正二位、前権中納言、按察使。父は綾小路有俊。家伝の郢曲や笛を能くした。

田向重治は、享禄元年（一四五二）誕生（『公卿補任』没年の年齢から逆算）、天文四年七月二十一日没。八十四歳。当時五十五歳。従二位、前権中納言（十月十九日権中納言辞任）。連歌もよくし、『新撰菟玖波集』に入集している。

東坊城和長は、寛正元年（一四六〇）誕生。享禄二年十二月二十日没。七十歳。文明十九年（一四八七）に文章博士、明応五年（一四九六）に大内記、明応八年（一四九九）に大学頭。学者としての名声が高く、明応十年の辛酉革命には新年号「文亀」を勧進した。当時四十七歳。従三位（十月十三日に正三位）、参議、十二月五日に侍読。冷泉永宣は、寛正五年（一四六四）誕生。享禄三年（一五三〇）没、六十七歳。当時四十三歳。従三位、参議、右兵衛督。

（2）歌題

歌題は、藤原為家の百首題の一つ「一夜百首」⁵⁾で春二〇首・夏一〇首・秋二〇首・冬一〇首・恋二〇首・雑二〇首の構成である。これは、文明十二年九月一日起日俊土御門天皇主催着和歌と同一である。⁶⁾この文明十二年九月一日に、当時の皇太子であった勝仁親王は、後土御門天皇と同じ日程で着和歌を催している。後土御門天皇に薫陶を受けた勝仁親王は、天皇となり藤原為家の「一夜百首」題の着和歌に挑戦したとみられる。

（3）原本と写本

原本は不在であるが、江戸時代の写本が残っている。国立歴史民俗博物館高松宮家伝来禁裏本「禁裏御著和歌」④、宮内庁書陵部「御着到部類」③、国立公文書館内閣文庫「日次歌集」①、宮城県図書館伊達文庫「近代著和歌」④、水府明徳会水戸彰考館本「近代著到（近代著和歌）」③の五本である。すべての写本で秋の18紅葉映日・19暮秋露・20惜九月盡の三日分が欠落している。また、六人全員の和歌が残っているのは、春1・春4・春9・春13の都合六日のみである。なお、御製が欠落している場合が多い。

起日は十一月九日と記されているが、この月は小の月で、翌月も十一月（大の月）であるから、十月九日の誤りの可能性はある。しかし、偶数を嫌って十月をあえて十一月とし、閏月を含め十一月を三度続ける作を行っているのではなからうか。また、最初の十一月には十二日が二回ある。これらは、写し誤りとするよりは、曆上の作爲的な誤りを含ませ、奇異な構成を故意に行っているように思える。

（4）特徴

このように曆を作為した奇妙な着和歌が実際に行われたのであろうか。『実隆公記』永正三年十一月十五日条に以下のような記載がある。「菅相公来臨、禁裏著和哥被談之、及昏前源中納言来臨、被談竹園若州御領事」。これによれば、東坊城和長が三条西実隆邸に来て、確かに後柏原天皇主催の着和歌について相談をして

いる。

永正三年十一月九日起日後柏原天皇主催着到和歌は、以下のような特徴を持つ。①文明十二年九月一日起日後土御門天皇主催着到和歌と同一の歌題である。その歌題は、『明題部類抄』によれば「一夜百首」の名を持つ藤原為家の百首題である。②非節供起日・一日二度詠・二度十一月（閏十一月を含めると三度）の反規則性がある。この作爲は、①の前天皇の芸能を踏襲しながらも新奇を求めるという他に見られない意欲的な企画と言えよう。

宮内庁書陵部「御著到部類」を底本とし、他の写本を対校した翻刻を後載する。

四 永正十六年三月三日起日後柏原天皇 主催着到和歌の概要

（1）詠者

詠者は、御製、知仁親王、伏見宮貞敦親王、従二位権中納言・三条西公条、従二位前権中納言・冷泉永宣、正三位権中納言・下冷泉為孝、正三位権中納言・中山康親、従三位・参議上冷泉為和、正四位下左中弁藏人頭・武者小路秀房、従四位下左中將・飛鳥井雅綱の一〇人である。

後柏原天皇は、寛正五年（一四六四）十月二十日誕生、当時五十六歳。在位は明応九年（一五〇〇）十月二十五日から大永六年（一五二六）四月七日（没）、六十三歳。

知仁親王は、明応五年（一四九七）十二月二十三日誕生、弘治三年（一五五七）九月五日没、六十三歳。当時二十三歳。後柏原天皇没後、後奈良天皇として即位。在位は大永六年（一五二六）四月二十九日から弘治三年（一五五七）。

貞敦親王は、伏見宮第六代当主。長享二年（一四八八）誕生、元龜三年（一五七二）七月二十五日没、八十五歳。当時三十二歳。父は邦高親王。後柏原天皇の猶子となる。文龜二年（一五〇二）に元服、永正元年に親王宣下。歌集「貞敦親王御詠草」。

三条西公条は、文明十九年（一四八七）誕生。永祿六年（一五六三）没、歳。当時三十三歳。従二位、権中納言、大宰権帥、神宮伝奏。父は実隆、母は勸修寺教秀の三女。父実隆から古今伝授を受ける。法号は称名院。享祿二年（一五二九）に後奈良天皇に古今和歌集を進講。歌集「称名院集」。

冷泉永宣は、寛正五年（一四六四）誕生、享祿三年（一五三〇）没、六十七歳。当時五十六歳。従二位、前権中納言。

下冷泉為孝は、文明五年（一四七三）誕生、天文十二年（一五四三）没、六十九歳。当時四十五歳。正三位、権中納言。父は政為。中山康親は、文明十七年（一四八五）誕生、天文七年（一五三八）没、五十四歳。当時三十五歳。正三位、権中納言。

上冷泉為和は、文明十八年（一四八六）誕生、天文十八年（一五四九）没、六十四歳。当時三十四歳。従三位、参議。父は為廣。歌集「為和卿集（今川為和集）」定家流の書跡でも有名。

武者小路秀房は、明応元年（一四九二）誕生、永祿六年（一五六

三) 没、七十二歳。当時二十八歳。従四位上、右中弁。父は賢房。飛鳥井雅綱は、長享三年(二四八九)誕生、元龜二年(一五七二)没、七十五歳。当時三十一歳。従四位上、左近中将。父は雅俊。

(2) 歌題

歌題は春・夏・秋・冬・恋・雑の順ではなく、「春秋」三〇首、「夏冬」三〇首、「恋雑」四〇首の構成である。例えば、「夏冬」であれば、首夏、初冬、卯花、時雨の順になっていて、夏の題と冬の題が交互になっている。この組題は、文永八年六月一日宗尊親王主催歌合で用いられたものである。⁽⁷⁾

(3) 写本と原本

江戸時代写本では、下冷泉為孝の一句と「夏冬」の四月四日(三十一日) 首夏から五月三日(六十日) 都鄙歳暮までの三〇日間分だけが掲載されている。国立歴史民俗博物館高松宮家伝来禁裏本「禁裏御著到和歌」⑥、宮内庁書陵部「御着到部類」⑤、国立公文書館内閣文庫「日次歌集」③、宮城県図書館伊達文庫「近代著到和歌」⑥、水府明德会水戸彰考館本「近代著到(近代著到和歌)」⑥の五本である。

現存する原本はすべて「夏冬」のうちの四日分である。

① 四月十九日(四十六日) 夏冬十六日) 雪中興遊、影写本・竹内文平所蔵文書一(三〇七一・五六一一八)、② 四月二十日(四十七日) 夏冬十七日) 五月雨晴、京都国立博物館所蔵(B甲八八九)、③

四月二十一日(四十八日) 夏冬十八日) 千鳥曉鳴、思文閣墨跡資料目録四三〇号(二〇〇八年六月十五日)、④ 四月二十二日(四十九日) 夏冬十九日) 照射、『大東急記念文庫善本叢書中古中世篇別巻四 集古筆翰第一輯』(汲古書院、二〇一八年三月)。

原本・竹内文平所藏文書二（東京大学史料編纂所）
 十九日 雪中興遊 46

- 1 か^可へる^遍さ^留も^毛わすれ^者は^留て^留ね^留と^留くる^留、野^尔に^尔
 けう^遠を^可さ^可か^可する^遊ゆ^起きの^乃花^可か^可も^可
 庭^尔に^流みる^能雪^乃の^乃朝^可の^可あ^可か^可なく^尔に^尔
 又^奈駒^天な^以めて^徒いつ^留る^留野^留へ^留哉^留
 春^春秋^春を^奈おも^可ひ^可す^可く^可して^連な^者か^者む^者れ^者は^者
 ま^多た^農一^乃ころ^乃の^乃雪^乃の^乃花^乃園^乃
 た^堂れ^禮を^越又^婦と^奈ふ^奈とは^於な^於し^於に^於おも^地ふ^地と^地ち^地
 船^佐さ^無して^志ミ^志む^志今^志朝^志の^志し^志ら^志雪^志
 う^徒ち^累い^乃つ^乃る^乃雪^乃の^乃す^乃糸^乃野^乃に^乃駒^尔と^尔め^天て^天
 み^連れ^連は^連と^連ふ^連へ^連き^連や^連と^連も^連忘^連つ^連
 花^天と^天め^天て^天月^満と^可ま^可か^可へ^天て^天く^天る^天、日^類に^類
 あ^可か^怒ぬ^古こ^古、ろ^尔そ^尔雪^津につ^世く^留せ^留る^留
 と^登ハ^多て^地又^可た^可ち^可か^遍へ^留る^尔波^尔に^尔舟^毛さ^毛す^毛も^毛
 心^志ハ^留し^留る^留や^个け^乃ふ^乃の^乃し^乃ら^乃雪^乃
 秀房
- 2 庭にみる雪の朝のあかなくに
 又駒なめていつる野へ哉
 知仁
- 3 春秋をおもひすくしてなかもれは
 また一ころの雪の花園
 貞敦
- 4 たれを又とふとはなしにおもふとち
 船さしてミむ今朝のしら雪
 公條
- 5 うちいつる雪のす糸野に駒とめて
 みれはとふへきやとも忘つ
 永宣
- 6 花とめて月とまかへてくる、日に
 あかぬこゝろそ雪につくせる
 雅綱
- 7 とハて又たちかへる波に舟さすも
 心ハしるやけふのしら雪
 秀房

- 8 花^尔に^尔め^尔て^尔月^可に^可む^可か^可ふ^婦も^無さ^可む^可か^可ら^怒ぬ^怒
 雪^尔と^尔そ^尔人^可に^可ひ^可か^可り^楚そ^連へ^連ぬ^連れ^連
 康親
- 9 ふ^布る^累を^遠の^乃ミ^阿あ^可か^可ぬ^可ハ^可か^可り^可か^可も^可ろ^可と^可も^可に^可
 雪^遠を^須め^能くら^能す^能袖^能の^能いろ^能く^能
 為孝
- 10 門^者は^奈な^越を^留明^遠る^遠夜^越を^越そ^古し^古と^古を^古く^古こ^古し^古
 や^屋と^者は^農伏^農見^農の^農雪^农の^农朝^尔に^尔
 貞敦

廿日 五月雨晴 47

1 さミ^{多連能}たれの程^{布留}ふる空^{奈連津}になれきつゝ、

今朝^{満者}ハまはゆき日^能の光^{可奈}かな

公條

2 木^乃の間より空^能のみとりもほ^{利本能衣}の見えて

五月雨^{者留}はるゝ太山^遍へのさと

永宣

3 さみ^{多禮盤}たれは雲^{乃飛万}の衣^{衣天}のひま見えて

うらめつらしき月^農の夕風

雅綱

4 雲^{盤多可}はまたかへるともなき山^{奈起}風に^耳

はれ間^者を見^{春留}する五月雨^能の空

秀房

5 さミ^{多禮盤}たれはなをい^{可那}かならん雪^遠水を

はこへるほ^{遍類本農}との晴間^{利盤}なりせは

康親

6 見^{奈怒}もなれぬ日影^{遠累}を吠^連る犬もあれや

五月^遠をくらす雨^{須能者}のはれ^盤まは

7 さミ^{佐多連乃者}たれのはれ^能まの夕日^能めつらしと

むか^可ふにあつき影^{尔阿}もわす^{王春禮天}れて

貞敦

8 山^{乃者毛}のはも今朝^{阿者}あらはれて五月雨^天に^尔

かさ^{可佐奈留}なる雲^越の晴間^流をそミる

知仁

9 ふり^{布利}くらす雨^春ハ五月^乃のならハしに

た^堂のまぬ雲^{乃者}のはれ^万ま成らん

為孝

10 あふち^地開五月^農の雨^乃の晴間^乃より

ミ^利とりすゝしくかよふ夕^可かせ

和

原本・『思文閣墨跡資料目録』四三一号（二〇〇八年六月）
廿一日 千鳥曉鳴 48

1 さ夜千とりゆふつけ鳥にあまの戸の
あくるもしるく聲あハす也

公條

2 ふな出をもいまやおもふあかつきの
しほにひかれて千鳥鳴く也

永宣

3 磯枕うきねの波のねさめをも
よそにかたらふ友千とりかな

雅綱

4 いく浦の月にすきて有明の
まくらの波に千とりなくらむ

秀房

5 友なしとおなしなミにや浦千とり
われもひとりのねさめとふらん

康親

6 猶のこるあり明の月をしたふ夜や
雲のなミにもちとり鳴らむ

7 あまのすむとまやにちかく鳴千とり
をのか友とやね覚問らむ

知仁

8 まさこ地やあやめも見えぬ明くれに
友よひかハし千とりなく也

為和

9 きくからにね覚かちなる身のうへを
おもふも夢の友ちとりかな

為孝

10 妻やとふわかれやおもふうらちとり
なくねにたへぬ有明の空

貞敦

原本・大東急記念文庫「集古筆翰」第一輯
(廿二日 照射) 49

1 𤇀奈怒ならぬ可これ於もお可ひ堂かたつ川鹿能の
ともし濃の可かけ希に尔まよふ者心は

雅綱

2 わ王かつ可ミ徒もの毛の乃かれ可ぬ連鹿のむくひもや
いと者は山能のともしさす可かけ遣

秀房

3 五月満や可ま可木屋かく可れ古やら路ぬ遠こをろをも
ともし毛の鹿尔におも可ふ那かなしさ

康親

4 あ氣け屋やら登ぬ能ともし志の影留もしめるらし
こ古の能した堂ふ可か支き宮城の露

5 あ阿は者れ禮なり利あ尔ふ可に可しか遍へ者は登と可ハ利かりの
ともし農に鹿農の留よ能る日の思盤ひは

貞敦

6 ともし春する流は山志しけ山氣しの徒ひつ、
ね柵に尔た堂に多たてぬ鹿や行覧

永宣

7 山布ふ可かミ能ともし古の鹿乃も比と
まつ川夜尔になれ連ハ明屋やらぬ空

知仁

8 あ氣け利ぬ能なり毛ともし能の影白も妙の
袖起まき遣あけて流かへるますらお

公條

9 夕見や者み毛は本ともし可のほ尔く毛し可ほ尔のかにも
い可かに尔さ徒つ越をのねらひすらし毛も

為和

10 こ古ろ路な奈き起さ乃つお志の袖もともしして
かり閑しく利柴能の露可やかへむえらむ

為孝

原本は歌題のみで、日付は記載されていない。⁽⁸⁾

①影写本・竹内文平所蔵文書二(三〇七一・五六―一八)には、①に続き②がある。また、②は四居萬次郎旧蔵であつたことが、文部省教化局編纂「重要美術品等認定物件目録」(昭和十八年)でわかり、四居萬次郎氏は京都国立博物館に寄贈している。そこで、②は竹内文平氏から四居萬次郎氏に渡り、現在京都国立博物館蔵となっていることがわかる。また、「四月十二日(三十九日) 嶋夏草」の原本の所在は現在不明であるが、「重要美術品等認定物件目録」に里見忠三郎氏の所蔵となっている。⁽⁹⁾

こうした現在の原本の様子から推量するに、原本全体は巻物三巻構成で、「夏冬」の三十一日目から六十日目までの第二巻のみ伝存し、寛文四年(一六六四)以前に一日ごとに切断された可能性が高い。後柏原天皇・貞敦親王・三条西公条の三人の歌のみ、別本で百日分すべて残存している。後柏原天皇は『列聖全集』、貞敦親王・三条西公条は『私家集大成7中世V上』にそれぞれ所収されている。後載する翻刻にはこれらもすべて掲げる。

なお、古記録にはこの着到和歌についての記載はない。

(4) 貞敦親王の詠歌についての検討

貞敦親王の詠歌については、宮内庁書陵部が所蔵している伏見宮家旧蔵資料により作成過程が詳細にわかるので、具体的に検討してみる。⁽¹⁰⁾すべてWEB上で確認できるので、伏見宮家旧蔵本の整理番号を記し、本の途中に記されている場合はコマ数も示す。

「後大通院御歌」(伏見一八三)中の「妙莊嚴院御歌」(A 52コマ、65コマとB 65コマ、77コマ)、C「貞敦親王著到百首和歌草」(伏見五二八)、D「貞敦親王著到百首和歌」(伏見五二七、三条西実隆添削)、E着到和歌の原本の五者の比較を比較する。⁽¹¹⁾

『大東急記念文庫善本叢書中古中世篇別巻四 集古筆翰第一輯』⁽¹²⁾に原本である四月二十二日(四十九日)照射が掲載されたので、その五番目にある貞敦親王の詠歌を取り上げる。

まず「妙莊嚴院御歌」のB(58コマ)では、貞敦親王が歌題「照射」について四首詠み、検討している。

ともしと松の煙と到にきこえ煙ハかり残る如何

①ともしさす山はしけ木の中空 松の煙そあけてのこれる

②思ひ入道はさハらてをしかまつ は山しけ山ともしさすらん

／＼あハれなりあふにしかへハとはかりの

③夏虫のおもひやおなし山ふかき ともしにしかの思ひハ

④／＼をしかのおもひもいと、たちそひて きえぬほくしの影やミ

ゆらん

①～④の四首のうち、①と③には書き込みがあつて考慮や再考の後が見られ、③と④に合点が打たれ、選ばれた。しかも、③の上句は「夏虫のおもひやおなし山ふかき」から「あハれなりあふにしかへハとはかりの」に変更された。

この結果が以下の「妙莊嚴院御歌」のA 74～75コマ目に反映さ

れている。

はなし

③／あはれなりあふにしかへハとハかりの 者禮 登 留 日
さとし 越 可 日 天 幾 衣 怒 本 登
④ さを 越 可 日 天 幾 衣 怒 本 登 留 日 天
きえぬほくしの影やミゆらん

③と④のうちで、③が選ばれた。「妙莊嚴院御歌」の末尾に、「永正十六年三月三日百日於禁裏著到之和歌也。愚詠備 覧覧畢。同年六月十四日終功、毎度令参内書之」とあり、③の「あはれなり」が選ばれて着到和歌に清書されたことがわかる。なお、「あはれなり」に「はなし」が添書きされているが、「はかなしも」の誤りであろう。

次に示すC「貞敦親王著到百首和歌草」は、上句と下句の二行書きにしている。貞敦親王の自筆である。①から④のうちから③と④を選んだ段階を清書したものであろう。

はかなしも

③／あはれなりあふにしかへハとハかりの 者禮 奈 利 登 留 日 天
さとし 越 可 日 天 幾 衣 怒 本 登 留 日 天
きえぬほくしの影やミゆらん

④ さを 越 可 日 天 幾 衣 怒 本 登 留 日 天
きえぬほくしの影やミゆらん

D「貞敦親王著到百首和歌」を次に示す。末尾に「為稽古逍遥院

合点令所望畢」とある。

③は 可 奈 利 登 留 日 天 幾 衣 怒 本 登 留 日 天
あはれなりあふにしかへハとハかりの 者禮 奈 利 登 留 日 天 幾 衣 怒 本 登 留 日 天
さとし 越 可 日 天 幾 衣 怒 本 登 留 日 天
きえぬほくしの影やミゆらん

Cに「はかなしも」と添書きされたものが、Dでは「はかなし」の部分を採用されて、さらに「あはれなり」を改めて「はかなしや」となっている。

E原本『大東急記念文庫善本叢書中古中世篇別卷四 集古筆翰第一輯』を見てみよう。

③あはれなりあふにしかへハとハかりの 阿 者 禮 利 登 留 日 天 幾 衣 怒 本 登 留 日 天
さとし 越 可 日 天 幾 衣 怒 本 登 留 日 天
きえぬほくしの影やミゆらん

CとEは同一である。つまり、Cは内裏でそのままEのように清書された。そして、時間をおいて、Cは推敲され、Dとなって三条西実隆に提出され、添削を受けたことになる。従って、貞敦親王の着到和歌の作成過程は、B↓(C⇐A)↓E↓Dの順になる。

(5) 特徴

これは、後柏原天皇主催の最後の着到和歌である。通常の歌題である春・夏・秋・冬・恋・雑の順に兼題となる規則を破り、「春秋」三〇首、「夏冬」三〇首、「恋雑」四〇首の百首構成となっている。

例えば、「春秋」では春の歌題と秋の歌題が日が変わるたびに交互にあらわれ、詠者にとっては目まぐるしく感じられたであろう。しかし、これは単なる新奇なものではなく、文永八年六月一日宗尊親王主催歌合の歌題であり、伝統を踏まえた御会の催しであった。

貞敦親王の草案が多く残り、原本と照合することもできた。貞敦親王の尋常ならぬ意気込みが見て取れる。おそらく、この着到和歌創作の意欲性は貞敦親王に限ったことではないであろう。⁽¹³⁾ 貞敦親王が着到和歌の清書のあとでも推敲を重ね、逍遙院（三条西実隆）の添削を受けているところにも、詠者が和歌の完成度を高める努力を惜しまない態度が見られる。

おわりに

勝仁親王・後柏原天皇の着到和歌には、後土御門天皇のそれとは異なった形式のものが種々見られる。特に、永正三年十一月九日起日後柏原天皇主催着到和歌は、非節供起日・一日二度詠・二度十一月の反規則性を持ち、企画の面で意欲的である。一方、歌題は藤原為家の百首で伝統継承の面もある。次に永正十六年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌は、後柏原天皇の最後の着到和歌で、天皇・両親王参加の下で行われた。歌題構成が意欲的で、通常の歌題である春・夏・秋・冬・恋・雑の順に兼題となる規則を破り、「春秋」三〇首、「夏冬」三〇首、「恋雑」四〇首の百首構成となっている。なおこの歌題は文永八年六月一日宗尊親王主催歌合の歌題であり、

伝統を踏まえた御会の催しであった。

注

- (1) 私は起日と満日を除く九十八日分は籤（くじ）により決定されていたと考えていたが、籤を「せん」と解釈して題名や年号を記した札とするべきであるとする有力な説もある（本山八重子「室町後期の内裏着到和歌について―その作法の考察―」、代表武井和人「室町期歌合資料の総合的研究」調査研究報告会（二〇一八年八月三十一日））。
- (2) 列聖全集編纂会編、一九一五年～一九一七年。
- (3) 古記録にそれぞれその旨が記されているだけで、具体的な歌や配列などは不明である。それぞれの「着到」の特徴については、表1の下段に注記した。
- (4) 彰考館本では、「前源中納言」「前源」ではなく「源中納言」「源」としている。起日が十一月九日ではなく十月九日であれば、田向重治は権中納言であった。
- (5) 宮内庁書陵部蔵五〇九―七『明題部類抄』（全226コマ）には、「入道前大納言為家卿」の百首題が三つあり、「一夜百首」としてA立春水・初春霞：祝言（114コマ目から）、B歳暮立春・山霞：祝言（116コマ目から）、C立春・朝霞：祝言（118コマ目から）が掲載されている。また、国立歴史民俗博物館蔵『類題鈔』（『類題鈔』研究会編『類題鈔（明題抄）影印と翻刻』笠間叢書二六一、一九九四年）には、上巻60番目にB、上巻61番目にCが掲載されるが、「一夜百首」の記載はない。一方、国会図書館蔵『雪玉集一』（全72コマ）の「詠百首和歌」（62コマ目から）は文明十七年九月九日起日後土御門

天皇主催着到和歌であるが、この歌題はC立春・朝霞：祝言で、「禁中著到為家卿一夜百首題」と注記されている。そのため、拙稿「文明十七年九月一日後土御門天皇主催着到和歌の研究」では、Cを「一夜百首」としている。なお、為家のこの百首題は、後世に広く活用されている。『新日本古典文学大系四七 中世和歌集室町篇』（岩波書店、一九九〇年）には、心敬「寛正百首」・細川幽斎「玄旨百首」が掲載されているが、ともに為家の百首和歌Cが組題である。このように藤原為家の百首和歌の組題は後代に強い影響を与えている。

- (6) 『御湯殿上日記』 文明十二年九月一日条に「御たるはあすかるおほせらるゝ」とあるので、歌題の百題を飛鳥井雅康が作成したと考えていたが誤りで、飛鳥井雅康は為家百首を選んだとすべきである。
- (7) 『類題鈔』研究会編『類題鈔（明題抄）影印と翻刻』（笠間書房、一九九四年）の翻刻（上巻）67番目にある。

- (8) 歌題のみ記載して日付を記さない例に永正六年九月九日起日後柏原天皇主催着到和歌がある。原本は九月二十六日分落花入簾、『大東急記念文庫善本叢刊中古中世篇7和歌Ⅳ』（汲古書院、二〇〇五年）所収。

- (9) 昭和九年（一九三四）の影写本、昭和十一年（一九三六）のレクチュグラフにはない。

- (10) C書陵部蔵（伏五二八）「貞敦親王著到百首和歌（永正十六年三月）」とD書陵部蔵（伏五二七）「貞敦親王著到百首和歌（永正十六年三月）」は井上宗雄・小池一行編『中世百首和歌五』（古典文庫第四八〇冊、一九八六年）にも所収されている。なお、和歌史研究会編『私家集大成7中世Ⅴ上』には、のちに示す③の添書き「はかな

しも」は脱落している。

- (11) 「貞敦親王御詠」（伏見一四〇）の14コマ、23コマに細字体で、「貞敦親王御詠」（伏見一八〇）の13コマ、22コマに太字体で記載されたものは、ともにD「貞敦親王著到百首和歌」（伏見五二七、三条西実隆添削）の写しであるから、比較検討の考慮に入れない。

- (12) 「集古筆翰第一輯」の冒頭に「1—1 後柏原天皇 着到和歌懷紙断簡」の紹介があるが、これは文明十七年九月九日起日勝仁親王主催着到和歌の十一月十一日水鳥（六十二日目、冬の七日目）であり、勝仁親王が原本を写したものである（拙稿「文明十七年九月九日起日勝仁親王主催着到和歌の研究」『岡山朝日研究紀要』三六、二〇一五年）。

- (13) 文明十二年九月一日起日後土御門天皇主催着到和歌の新資料として、高松宮家伝来禁裏本「百日和歌」（H一六〇〇—一六三六函三）がある。例えば立春水では五首、初春霞では三首など、百首すべてに三首以上の候補句があり、推敲の跡や合点による選首が見られる（代表武井和人「室町期歌会資料の総合的研究」調査研究報告会（二〇一八年八月三十一日）での石澤一志の口頭報告「文明十二年九月一日起日後土御門天皇主催着到和歌」の新資料」によりご教示を得た）。

（付記1）これは、二〇一八年八月三十一日に埼玉大学東京ステーションカレッジで開催された代表武井和人「室町期歌会資料の総合的研究」調査研究報告会で、「後柏原天皇主催着到和歌の特徴——永正三年と永正十六年の着到和歌を事例に——」として口頭報告をしたものを基礎にそれぞれの着到和歌を翻刻したものを加えて成稿したものである。

(付記2) 国文学研究資料館、東京大学史料編纂所、宮内庁書陵部、国立公文書館、国立歴史民俗博物館、国立国会図書館のデータベースを活用した。

五 永正三年十一月九日起日後柏原天皇主催着到和歌の翻刻

永正三年十一月九日起日後柏原天皇主催着到和歌

―宮内庁書陵部書陵部所蔵「御着到部類」(五〇一―七九七) 当該部分の翻刻―

宮内庁書陵部蔵「御着到部類」の三番目(画像48コマ目から68コマ目)が永正三年十一月九日起日後柏原天皇主催着到和歌である。これを底本として翻刻した。この着到和歌は後柏原天皇を含め六人の詠者によるものである。歌題は藤原為家の百首題の一つである。書陵部蔵『明題部類抄』によれば「一夜百首」の呼称があり、春二〇首・夏一〇首・秋二〇首・冬一〇首・恋二〇首・雑二〇首の構成である。現在原本は確認できていない。

この書陵部蔵「御着到部類」以外の写本は、①国立歴史民俗博物館高松宮家伝来禁裏本「禁裏御著到和歌」、②国立公文書館内閣文庫「日次歌集」、③宮城県図書館伊達文庫「近代著到和歌」、④水府明德会水戸彰考館本「近代著到(近代著到和歌)」の四本である。翻刻における注(※)での略称は、①…高、②…日、③…伊、④…彰とする。

底本を含めすべての写本で秋の18紅葉映日・19暮秋露・20惜九月盡の三日分が欠落している。従って、これらの親本は同一系統と考えられる。起日は十一月九日と記されているが、この月は「廿九日待郭公(夏の2)」で終わり、次の日は「十一月一日柝覚郭公(夏の3)」である。これもすべての写本で共通である。

(凡例)

- (1) 月日(或いは日付)・歌題の下に、起日十一月九日からの日数を記し、さらに春・夏・秋・冬・恋・雑の各部での順を記した。例えば、十一月「廿九日待郭公 22 夏の2」は、22日目では2番目という意味である。
- (2) 各日(各歌題)に六人・六首あるはずである。和歌の頭に先頭から順に算用数字でその順番を記した。例えば十一月十八日春日遅(春の11)の場合、本来六首あるべきであるが、五首しかない。しかも、そのうち二首に詠者が欠落しているので、欠落した詠者を特定できないので、一句欠とした。欠落の詠者が確定できる場合はその名を記した。
- (3) 上の句と下の句の間を一文字分空けて一行に記し、最後に詠者を記した。詠者は底本の記載通りにした。また、平仮名の字母は、右側に小さくそれを記した。
- (4) 網掛けを施した部分は、※の後に注記した。※のあとに略称がないものは、この書陵部蔵「御着到部類」についての注である。「※彰…」の場合は、水戸彰考館本「近代著到(近代著到和歌)」では異なった記載である。一つの歌に複数の注がある場合は、「※2」などとした。

十一月九日 立春氷 1 春の1

- 1 よし野川こほりなかれていつしかに 春たつ名もや瀧つせのこと
本里 奈可 亭 多川 津世能古
- 2 山川やこほりをいて、行水に こゑうちそふる春のはつ風
本利 乃 留 乃
- 3 けふよりハ池のこほりもとけぬへき 水の心やはるををしるらん
个 利 乃 本里 能 者 留 志 留
- 4 けふも猶氷れる池のよろつ代ハ 春をためしにきこえあくらむ
个 連 留 津 多
- 5 年なミのよする然にとけそめて 氷のうへのはる風のあと
奈 留 尔 者 留 乃 阿
- 6 音羽川こほりなかるゝ山風に 春たつ波もくたけてそ行
本利 奈可 留 耳 多川

御製
※伊：波。影：音

式部卿宮

按察使

前源中納言

※彰：源中納言

菅宰相 奈清繁

※2伊・彰：をと、音。

新宰相

※彰・伊：4と5の位置が逆

十日 初春霞 2 春の2

- 1 やま鳥の尾上のかすみをのつから 春たつ色はたてさりけり
屋万 能可 津可 多川 盤 多 利 个 利
- 2 春さても消あへぬ雪の山かせに 霞もやらぬ空のさむけさ
能 可 勢 耳 能 遣
- 3 をのつから去年のたかねの雪の色も かすみにつる春やきぬらん
津可 多 可 年 乃 可 須 留 乃
- 4 すきたてるかたはいつくそ春きぬと かすみしるしをミ輪の山もと
多 留 多 津 可 志 留 乃
- 5 春も又今朝をハしめの山風に かすみもさむき色にたつなり
能 尔 堂 川 利
- 6 いつる日のかすみのころもそめいろの 山のいつくも春やきぬらん
留 乃 可 能 乃 徒 川

式

前源

按

菅

新

十一日 雪中若菜 3 春の3

- 1 若なつむ友もあまたにさそひいて、 雪とそミつる萩のやけ原
奈 多 楚 留
- 2 空にさへ雪間もみえぬこのころの 野へのわかなはいかてつまし
衣 乃 能 王 可 那 可 徒
- 3 雪ふかき野へにいて、もねのひせし あとをしるへのわかなをそつむ
婦 可 尔 毛 祿 世 志 留 可 奈 遣
- 4 つミかねて若なハたまる程もなし 雪にやおもきたもとなるらん
可 祿 天 奈 留 尔 起 多 奈 留
- 5 花の色のさすかに雪もあをやかに したのわかなを見するのへかな
須 可 尔 阿 遣 可 志 多 可 奈 越 留 乃 可 奈
- 6 もとめゆくあとよりほかにきえやらぬ 雪間ハ野へのわかな成けり
利 可 屋 乃 王 可 那 个 利

※彰・伊：この句なし。高・日：この句あり

新

菅

按

前源

式

十二日 初鶯 4 春の4

- 1 うくひすもけさこそ初音さそはれて こゝろかろくや春にみえまし
春 可 路 衣
- 2 なれのミや初聲ならんきくたひに 我身ふりゆく春のうくいす
奈 奈 多 尔 利 能 春
- 3 谷の戸や風さむからしけさき鳴 ミやこををのか春のうくいす
乃 乃 遣 可 可 本 尔 春
- 4 ものことにしらるゝ春をうくひすや われつけかほに初音鳴らん
本 須 春 多 王 連 希 可 本 尔
- 5 ほとゝきすともにすたちしうくひすも はつねまたれて今朝や鳴らん
者 多
- 6 きく人をなれも初音の春にして またきに來なく谷のうくひす
遠 奈 能 多 起 尔 奈 乃 春

※彰・伊・日：は

式

前源

按

菅

新

※彰：き

十二日 簷梅 5 春の5 ※彰：十三日 欠：式部卿宮

- 1 軒ちかミ出入こすのをひかせも 袖のほかなき梅かゝそする
2 さそひこし軒ハをとをミ梅かゝに ミぬ色ふかきはるかせそふく
3 梅かほる軒ハに春はさそハれて 松にや風のをとたゆむらん
4 した水のよそにさそはん色もおし のきハの山の梅さけるかけ
5 とひこぬを人にとハ、やゆきやらて さすかにミつか軒の梅かえ

前源 按 菅 新

十三日 門柳 6 春の6 欠：式部卿宮

- 1 まゆひらく春もたのますおいらくの 門にくち木の青柳のかけ
2 さしこもるむくらの門も春にあけて くる人あれやあをやきの陰
3 みたれあふねくたれかミかゝいもかかと あくるあしたになひく青柳
4 しつかすむ門田のくろのさし柳 人にゆつらんさかひともし
5 すきのかと松の戸ほそも春そとハ なひくにするく青柳のいと

前源 按 菅 新 ※彰：伊・高・日・き

十四日 帰厂知春 7 春の7 欠：式部卿宮

- 1 あまつかりきてもとまらぬことハりを 春にはいかて契りをきけん
2 はるをしもミすて、かへる時そとハ いつしりそめしあまつかり金
3 春にいまあふにわかれのありとしる 心よいかにあまつかりかね
4 かねひ、くいりえのむらのふかきよに 春も今ハのかりの別路
5 一とせハかへらぬ花のためしをも ミやこにのこせ天つかりかね

前源 按 菅 新

※彰：伊にいかてか

十五日 二月餘寒 8 春の8 欠：式部卿宮

- 1 春風もさえかへる枝に散る梅の 花の雪そふきさらきの空
2 ふしのねにたくふをひえも雪きえて 猶時しらぬ春のなか空
3 こそよりもこほりし雲を吹かへす あらしやさむき二月のそら
4 をそからむはなもおもハてきさらきの 雪めつらしき春の空かな
5 消のこる色よりさむし風をハ 雪もやさそふきさらきの空

前源 按 菅 新

※彰：式部卿

十六日 故郷春月 9 春の9

- 1 さとはあれぬかゝる所の春をこそ 霞にのこる月にたつねめ
式
- 2 おもひやるあはれもふかしことのねの 月にかすめるよもきふの宿
前源
- 3 ◆月八いまかすますとても見すてつる 人やハかへるふる郷のはる
按
- 4 ふる郷ハくもらぬ物を春の月 あれしいたまに影ものこらて
菅 ※彰・伊…す
- 5 なみたうきふる里人の袖にミテ むかしの月ハ数まさりけり
新
- 6 おもふにもむかしの春よふる郷ハ 去年をこふるも月そかすめる
※彰・伊…は

十七日 夜春雨 10 春の10 欠…御製

- 1 さひしくもなかくらしてねぬる夜の 夢路露けき春雨の空
前源
- 2 ◆とし火の影うちしめりふる雨に 春ものふかきよハのさひしさ
按
- 3 あはれふかき夢も見ぬよの袖のうへを あやしむハてハ春雨の空
菅
- 4 ふくたひに雨もおりくをそそひて 春にしくる、よハの松風
新
- 5 おもふ事つきぬまぐらの雨のをとに あかしかねてハ春のよもなし
式

十八日 春日遅 11 春の11 一句欠

- 1 ◆天地のひらけしよりやのとかなる 心をはるとななき日のかけ
前源
- 2 も、ちとりも、さへつりのこゑをき、て春の日ハくれなまし
按 ※彰・伊…高…て ※2彰…(説めず。伊…空白 ※3日…くれなからまし
- 3 なすわさのなき心よりわひぬるや けふもあまりになかき日の影
菅 ※彰・伊…高…て ※2彰…(説めず。伊…空白 ※3日…くれなからまし
- 4 くれやらぬ雲にそおもふこしかたハ 春にやあハむ月日なりけん
菅 ※彰・雲(雲)伊…雲
- 5 いたつらにくらすな春の一日をハ ふゆのいくかになしてみるへき
式

十九日 尋花 12 春の12 一句欠

- 1 心あてにたれもゆくらしよしの山 あらぬかたにや花ハたつねん
前源
- 2 たつねこしこそその日かすもこの比と はなにかそへて行山路かな
按 ※彰…こと(こそ)伊…こと
- 3 おもかけのはなをそれかとしら雲の たつきもしらすまよふ山かな
式
- 4 わけやミントころもさらぬ鳥の音ハ 花なりけりな峯のしら雲
新 ※彰…きえぬ(さらぬ)伊…きえぬ
- 5 咲きぬやと山に分入こゝろさし あさしとハよもはなもおもはし
式

廿日 見花 13 春の13

1 あかぬこゝろあくハかりにも身にはさて 花にむくひを見る世ともかな

2 をそくとくさかりをかへて咲花や なへて見るへき人をまつらむ

3 いつの春かおもひのとめて花をみん 待もおしむも心つくしを

4 なにかハおもひ出にせん人なみに 花みる春のなからましかは

5 春ことにことしハこそにまさるそと 色かをおもふ花にも有かな

6 たえずおもふ心やはなにあらハれて 見るかうちより色香そふらん

※彰・伊・高・日：空白

※彰：接察

廿一日 翫花 14 春の14 二句欠

1 いかにせむみつゝくらせるはなにもまた 月も木のまのあかぬひかりを

2 色香にはをよハぬ心ことのはを いくたひ花につくしきぬらん

3 あくかるゝこゝろも花ハいかにミむ をのかうつろふ色にならハ、

4 咲そめてうつろふまでになるゝとも あく事あらぬ花の色かハ

※彰：は

廿二日 折花 15 春の15 一句欠

1 おもひすてかへるものゆへ山さくら なこりありとハたれ手折らん

2 ミぬ人のためにとたをる一枝ハ わかものならぬ山桜かな

3 一えたハかさしさらめやおいか身を 花にわするゝ名にハたつ共

4 ちりぬへきかことに人のおりとるや 花はさそともおもひゆるさし

5 花のかのうつらんものを山さくら おる袖せはきことをしそ思ふ

式

前

廿三日 惜花 16 春の16 一句欠

1 よしさらハしたふ心もさそひ行 はなにのこすな春の山風

2 ひとりみて思ふもかなし世にしらぬ ミ山の花のうつろへるいろ

3 心なき風のうへをハいハしたゝ おしむにはなは散ものにして

4 又もみん身をやをしまん咲花の 春いつねなる世を思ふにハ

5 はなもわかあたるいろをおもへはや うつろふかけの露けかるらん

※彰・伊：太。※2彰・伊：比

式

前

※彰・伊：こと

廿四日 三月三日 17 春の17 一句欠

1 おりしもあれやよひもけふにさくも、の 花を光ににほふ三か月

式

2 ミ千とせをかさねてちきれさかつきに うか^可る花のも、しきの春

前 ※彰・伊…へ

3 すゑとをく君かそへみよミ千とせを 百にかさねんも、のさかつき

4 以具^乃春のけふにかめくるそま人の あいのうちなるも、のさかつき

5 又も身にめくりやあはんミ千とせの 花のさかつき春を契りて

新

廿五日 款冬 18 春の18 一句欠

1 やまふきのいハぬ心にいもせ山 した行水やとむす^春らん

前

2 さとはあれて花のかけくむ人もなし ゐての山吹さき散まて

※伊…お。※2伊…す（せ懸）

3 花のうへの露やおちても玉川の 名になかれ行ゐての山ふき

式

4 を^遠きさそふひまなきものをやま吹の 咲かさなれる花のゆふ露

※伊…お

5 やまふきの色をも袖にうつし^津みん むすへハかほるはなのした水

新

廿六日 松間藤 19 春の19 一句欠

1 ◆ふちなミもあらしのすゑの松かえに こゆるや春のわかれなるらん

前

2 しハしハとたのミかほなる藤かえも つれなき袞の風にちるなり

※彰…式部卿

3 ◆吹か、る花のしなひも松かえの こけのみたれてにほふ藤なミ

4 春ことに藤ふくころそ松たかみ を^遠よハぬ浪もこすとみえける

※2伊…お。日…さく。

5 さそへともちらぬためしの花もミつ あらしの松にかゝるふち^可かえ

新 ※彰…波

廿七日 三月尽夕 20 春の20 一句欠

1 なを春としたひあかさ^阿んあか月の かねてもおしき入相のこゑ

2 このゆふへいさたひたちて行春を 一夜とまりの空までハミむ

3 なをさりに春もくれぬとおもひしや けふよりさきの入相の聲

式

4 なかき日といひしハいつ、けふのミと おもふにはやきゆふくれの空

5 入逢のこゑするかたの夕まで つらきハ春のわかれなりけり

新

廿八日 卯花似月 21 夏の1 一句欠

1 そのまゝに入乃かた見可多せぬいさよひの 月影乃やとす庭者のうのはな

2 卯花満可のまかきを山とこえゆかハ す乃へに月奈なきみちやま満とハハ

※伊・高・日…あ、
※彰・伊…よ

3 夕月の影とハミれとこかくれの みちたとくし遠留さけるうのハな

式

4 うの花乃可のかきほや春遠多をへたつられ かすまぬ月のかけやとるころ

5 卯花可利遠のひかりをそれとおもふより した葉も月のかけらとぞミる

新

※彰・伊…213↓415↓1の順

十一月一日 祢覚郭公 23 夏の3 欠…菅

1 世遠可をかこち身遠をうらむるもほと、きす を遠可のかこへなる祢覚奈留とをしれ

2 ほと、きす鳴須つるこゑも見し夢能の 名利者こりはかなきさ夜能の手枕

式

3 祢覚留多して見るたにあるを留遠郭公 ありあけの月にねをもそへぬる

新

4 夢うつ、き、こそわかねほと、きす こゑおとろかす夜ハ乃のねさめハ

按

5 ねさめしてこよひきかすはこ、ろなき 我名於もおしき郭公可奈かな

前

※彰…に

廿九日 待郭公 22 夏の2 一句欠

1 たかためとなれもさたむ奈郭公 きくをめしなるはつねまつよに

※彰・伊…る

2 ほと、きすとしにかハらぬふるこゑと おもふ物毛可からまたれすもなし

式

3 わりもなくてなかなすはよしや ほと、きすまたぬ身須多にして初音聞奈なん

新

4 我心なくさむものをほと、きす 人もきかすとかたる夕は

按

5 まつことをかたりあハせてことのはに きかぬよもなきほと、きすかな

二日 五月郭公 24 夏の4 欠…御製

1 たちハなのかほるまぐらのほと、きす なみたもおなしむかし可遠をやる

式

2 かハかりも鳴祢ねやかハるほと、きす 卯月乃さ月のとをからぬまに

新

※彰・伊…、(ま)

3 年古ことにをのかさ月の名ハふりて こゑめつらしきほと、ときすかな

按

4 郭公津いつくを遠可のかきとて 都乃の空耳にこゑのまねなる

前

5 わかやとのあやめかりふく五月まで なんと郭公奈しらすかほなる

菅

※彰・伊…お。※2彰・伊…さ月。日…さつ。高…空白ツメ

三日 菴五月雨 25 夏の5 欠…御製

- 1 五月雨にあらても袖ハくちぬへき おもひにたえぬ草のいほかな
五月雨にあらても袖ハくちぬへき おもひにたえぬ草のいほかな
五月雨にあらても袖ハくちぬへき おもひにたえぬ草のいほかな
五月雨にあらても袖ハくちぬへき おもひにたえぬ草のいほかな
五月雨にあらても袖ハくちぬへき おもひにたえぬ草のいほかな

式 新 按 前 菅

四日 夏草露 26 夏の6 欠…御製

- 1 をさまよふ露のひかりを花とみて 焔をもまたし野への夏草
をさまよふ露のひかりを花とみて 焔をもまたし野への夏草
をさまよふ露のひかりを花とみて 焔をもまたし野への夏草
をさまよふ露のひかりを花とみて 焔をもまたし野への夏草
をさまよふ露のひかりを花とみて 焔をもまたし野への夏草

式 新 按 前 菅
※彰・日…ゐ

五日 里螢 27 夏の7 欠…御製

- 1 やり水の螢ハかりや見し影の むかしににたるをの、やまさと
やり水の螢ハかりや見し影の むかしににたるをの、やまさと
やり水の螢ハかりや見し影の むかしににたるをの、やまさと
やり水の螢ハかりや見し影の むかしににたるをの、やまさと
やり水の螢ハかりや見し影の むかしににたるをの、やまさと

式 新 按 前 菅

※彰・伊…お ※2彰・伊…そ

六日 夜河篝火 28 夏の8 欠…御製・邦高親王

- 1 山かけハなを夜をのこすか、り火に のほるう舟のとをき河上
山かけハなを夜をのこすか、り火に のほるう舟のとをき河上
山かけハなを夜をのこすか、り火に のほるう舟のとをき河上
山かけハなを夜をのこすか、り火に のほるう舟のとをき河上
山かけハなを夜をのこすか、り火に のほるう舟のとをき河上

式 新 按 前 菅

※彰・やミ兼

七日 遠夕立 29 夏の9 欠：御製

1 ふり^布ハて、雲一むらのゆふ^多たちに ミゆる^{留可}かき^利りハくも^毛るぞ^流ら^{羅可}かな

新 ※彰・伊…いたし

2 夕立^盤は山めくり^利する空^{留可}なから こ^古、にきこえて^尔なるか^{留可}みの^能を^遠と

按

3 ゆふ^多たちも雲の^乃いつく^能のミねこえて^春す、しき^乃風の^尔松に^多ふくらん

前

4 音あらく軒^{者可}のはかしハ風^{春起}すきて 山^能ハいつく^多のゆふ^多たちの空

菅

5 やま^{屋万}とをくミれハ入^可日の^{遣王}かけ^多わけて かた^多へす、しき^春夕立^可の空

式

九日 初秋風 31 秋の1 欠：御製

1 一葉^留ちる木^尔すゑ^起によハき風^亭みえて^遠を^多とにお^奈とろく^奈秋^奈としも^奈なし

按

2 そよ^{志能}さらに^遠しの、^ををさ^尔、のひと^{以可}夜^可にも い^可かに^{留可}ふ^{留可}き^乃か^乃ふる^乃秋^者の^者初^者風

前

3 身に^連しむもあ^可ハれとおも^可へかく^{徒毛}しつゝ つも^乃れ^乃ハ^者おい^者の^者秋^者のは^者つ^者風

菅

4 草木^多にもまた吹^多あへぬ^{志本留}風の^尔を^尔とも 心^{志本留}し^留ほる、秋^盤は^尔きに^个けり

式

5 吹^{免天}そめて^遠はやくも^可を^{留可}とのか^{留可}ハ^可る^可かな く^乃へき^乃秋^乃とや^乃庭^乃の^乃松^乃風

新

八日 樹陰納涼 30 夏の10 欠：御製

1 た^多くとし^流る袖^{尔奈}さへ^者秋^可にな^可ら^{遣尔}のは^農の^可か^可け^可に^可涼^可し^可き^可露^可の^可タ^可か^可せ

新

2 木^可かけ^可こそ^可す、し^可かり^可けれ^可行^春水^万を む^春す^万ハ^可ぬ^可ひ^可ま^可も^可風^可ふ^可か^可ぬ^可ま^可も

按

3 衾^{多可}たかき^{奈須}暮^{奈須}に^利ち^个り^能な^能す^能こ^能け^能む^能しろ み^利と^个り^能露^能け^能き^能色^能の^能涼^能し^能き

前

4 水^乃あさ^乃き^乃すす^乃さ^乃きの^乃柳^乃たち^乃よ^乃れ^乃ハ う^越を^越まつ^越さ^越きの^越み^越か^越も^越す、^春し^春き

菅

5 涼^王し^者さに^利われ^万は^万も^万りの^万神^万とい^万ま あ^可か^可す^可し^可め^可を^可く^可か^可し^可ハ^可木^可の^可か^可け

式

※彰・伊…と4の句の位置が逆

十日 初秋露 32 秋の2 欠：御製

1 い^{以万}ま^利よ^乃りの^乃露^利のか^利き^可り^可を^可い^可か^可に^可せ^可む あ^{志本留}き^多ハ^多け^多ふ^多た^多に^多袖^多の^多し^多ほ^多る、

菅

2 くる^留秋^{王遣}も^満わけ^地や^地ま^地よ^地ハ^地ん^地あ^地さ^地ち^地ハ^地ら あ^連れ^連に^連し^能さ^能との^能露^留の^留ふ^留る^留さ^留に

式

3 そ^{免天}めて^遠ミ^尔ん^尔草^尔木^尔の^尔う^尔へ^尔を^尔お^尔も^尔ふ^尔に^尔も つ^津ゆ^津こ^津そ^津秋^乃の^乃ハ^个、^个め^个也^个け^个れ

新

4 と^徒ひ^徒ミ^徒ハ^徒い^徒つ^徒く^徒は^徒あ^徒れ^徒と^徒を^徒き^徒そ^徒む^徒る 露^留や^留い^留か^留なる^留秋^能の^能し^能の^能、^能さ^能と

前

5 秋^可か^毛とも^毛き^毛く^毛ま^毛ても^毛な^毛し^毛や^毛か^毛て^毛ハ^毛や こ^多た^多ふ^多る^多ハ^多かり^多袖^多の^多露^多け^多さ

按

十一日 七夕後朝 33 秋の3 欠：新宰相・冷泉永宣

- 1 あまの川よそにかハさぬいはまくら 能 所ル可 者満 わかれて後もたのミなるらん 可連 多 留
- 2 さためをくとしのわたりのあまの川 多 万 かへるなミとて袖なぬらしそ 可 留奈 奈
- 3 今朝のまのちかきわかれもかなしきハ 万 可 可奈 あふせにとをきあまの川浪 世 阿万
- 4 つゆのまにあひミしほしのなのミ猶 遊乃 本 奈能 のこすや今朝の花の朝かほ 乃 須 可本
- 5 かさねつるよるの衣かたなハたの 徒留 留 可多那 多 わかれしけさの空のうきくも 可 可連 佐能 乃 毛

前 按 ※彰・伊：朝顔の花

式 菅

十三日 夜萩 35 秋の5 欠：御製

- 1 おきの葉に我こゝろをもやしをきて 耳 屋 遠 おきふし思ふ萩のさよ風 乃
- 2 ミし人の袖さへあやし夢さめて 満 満 まくら露けき萩のうハかせ 可起
- 3 ◆ なかき夜もねぬにやあけん風さやく 奈可起 祢 尔 遠 をとをまくらの軒の下おき 遠 満
- 4 さらくゝにねられすものゝさひしきや 祢 連 須毛 おきのはさそふ夜ハの秋風 乃者 乃
- 5 ◆ いくたひか山下おきのそよく夜に 可 起乃 尔 かけてハたゆる夢のうきハし 可連 堂 留 能 乃

前 按 ※彰：ぬ

式 菅

十二日 秋夕 34 秋の4 欠：御製

- 1 詠つゝおもふつらさのたか焔に 津 可耳 あらぬをかこつゆふへなるらむ 遠可 川 奈留
- 2 こゝろより焔の夕もうきものを 古 利 いハゝわれこそ我につられ 連 尔津 个
- 3 としをへておいの心のうきことに 遠 遍 天 能 たえずハいかゝ焔のゆふくれ 多 春 可
- 4 おほかたに秋のあはれをかこちしハ 本 可多 遠 ゆふへをしらぬ人や有けん 遠 志 个
- 5 さのミかく焔やハ人につらからん 佐能 尔津 可 おもひもわかぬ夕くれの空 王 可 農

式 菅 前 新 按 菅

十四日 朝萩 36 秋の6 欠：御製

- 1 ◆ 朝なゝうつろふはきはなハ又 奈 路 者起 者那 したハの焔にのころかな 志多 能 耳 累 可那
- 2 うつろふか下葉色つく萩か枝に 路 可 津 可尔 ひかりすくなき花の朝露 可利 奈起 乃
- 3 ◆ 朝ことにつらぬる袖もむらさきの 津 留 起 色こきときや萩の戸の秋 起
- 4 ◆ をく露のいつくハあれとも萩の戸の 乃 連 乃 能 あくるあしたの花にこそみめ 留 多 能
- 5 をしなへて色なりけりなしらすけの 奈 天 个 利 奈志 春 遣 満 まのゝ萩はら花の朝露 者

前 按 ※彰：お

式 菅

十五日 夕薄 37 秋の7 欠：御製

1 まねくらん袖のミ見えてくる、野の おはなかもとはとふ人もなし

式

2 ◆たか袖の夕への色にのこるらん おはなに過る露の秋かせ

新

3 しろたえのおはな袖も夕霧の まかきの内にかくろひにけり

前

4 むらすゝきまねくと見てもやすらハて くるれはいそく野への通路

按

5 野へミれハ草のほとゝふきわけて いまハ尾花に秋の夕かせ

菅

十六日 山初鷹 38 秋の8 欠：御製

1 秋風にむかふつハさやしほらん ミねこす雲のはつかりのこゑ

新

2 なれきぬるこしちの山の秋風や そらに忘れむ衣かりかね

前

3 こゑハまつ雲にきこえてくる尸の 山とひこゆる程そ久しき

按

4 さほ山の本すゑ色つく秋そとも たれおとつれて尸ハきぬらん 菅

菅

5 雲旁のつはさやをもき嶺こえて ゆくゝおつるかりのひとつら

式

※伊：お

十七日 田家鹿 39 秋の9 欠：御製

1 たてすみてをしねもるらん小山田に 鹿をふこゑのかすかなるさと

新

2 鳴鹿のつまこそあらめもる小田の いほねぬ人もなといとふらん

前

3 を田もるハをのれゆへそとおとろかて なといほちかきさほしかの聲

按

4 さゝのやにおなしねさめハちきらねと 山田のをしかなかぬよもなし

菅

5 守小田の心をもしれ秋の鹿 いとハれゆくハ妻はかりかは

式

※伊：お

十八日 野亭聞虫 40 秋の10 欠：御製

1 いはゝ又秋もうからすむし鳴て 草の花さく野へのかりいは

新

2 ◆ふか草や野となる里にたれをかも とふへき人と松むしの聲

前

3 ◆秋のゝにいつれを聞も草の戸の あるしかほなるむしのこゑゝ

按

4 草の戸もむしのねかれハのこらしを 霜ないそきそ野への秋風

菅

5 ◆野へのいほ露をうらみの虫のねも ことハりしるき草の本かな

式

※伊：お。 ※2伊：か

十九日 嶺月 41 秋の11 欠…御製

- 1 ふく^布となき^奈す^能糸の、露のうへまでも 月^尔にはれたる^{多留}峯^乃の^乃焔^乃かせ
2 雲^者旁^{津具}ハはらひつくしてたか窓の お^尔への月^乃にのこる^留あき風
3 峯^可たか^春み^{本里}のほりつゝ、くまもなき 月^尔に^遠を^乃くら^可の名^可そ^可かく^留れある
4 雲^留ハるゝ、ミねのくす^乃葉^乃の秋風^能は 人^乃のうら^可み^可ぬ^可月^可のかけ^可かな
5 わか^可こゝろ^利かき^奈りもなしやす^春みのほる 月^{本留}の行^{衛乃}糸^乃の嶺^乃の秋風
- 式 菅 按 ※彰・伊…お

廿日 谷月 42 秋の12 欠…御製

- 1 月^能は秋^可かけ^可ハこほ^{本連留多}れる^尔たに川^可に い^可かなる^留波^{乃者奈}のは^留なと^留ち^留る^舞らむ
2 こゝろ^{世与}せ^遠よ空^乃を半^{本尔}の谷^古のい^春ほに こ^乃よひ^春八月^春と我^春とす^春む^春へく
3 さ^佐よふ^可かく^利と^可りのからこ^可ゑ^可き^可こ^可え^可きて 谷^可かけ^可す^可こ^可く^可月^可か^可た^可ふ^可き^可ぬ
4 山^可ふ^可かく^可す^可む^可谷^可水^可の月影^起の き^起よき^{志留}こゝろ^起もし^起る^起人^起や^起なき
5 ◆山^可ふ^可か^乃き^乃谷^乃のした^乃水^乃も^乃と^乃め^乃きて や^流と^流る^流も^流月^流のこゝろ^遠を^留ぞ^留みる
- 式 前 按 菅 新

廿一日 海月 43 秋の13 欠…御製

- 1 し^{志留}るへ^留とて^留う^留かるゝ、月^希も^奈あ^留け^留ハ又^留 な^奈にと^留なる^留を^留のお^留き^留つ^留舟^留人^留
2 水^留を^留いて^留山^留に^留いる^留ま^留て^留よ^留そ^留に^留ミ^留ぬ 峯^津のつゝ^乃きの^乃海^乃の月影
3 伊^乃勢^{志本}のう^可ミ^可し^可ほ^可ひ^可のか^可た^可の秋^可の月^可 ひ^可かり^可を^可玉^可と^可た^可れ^可ひ^可ろ^可ふ^可らん
4 海^乃士^乃よ^乃い^乃か^乃にく^乃ま^乃なき^乃月^乃の^乃焔^乃とい^乃へ^乃ハ 海^乃のち^乃ひろ^乃の底^乃の^乃ミ^乃る^乃め^乃ハ
5 な^尔ミ^多風^多も^多松^多に^多へ^多た^多てゝ、月^可かけ^乃の し^{志川}つか^可た^留す^留め^乃る^乃よ^乃さ^乃の^乃入^乃う^乃ミ
- 式 菅 按 前

廿二日 湖月 44 秋の14 欠…御製

- 1 こ^留き^留い^留つ^留る^留舟^留も^留こ^留そ^留あ^留れ^留月^留に^留ハ^留と か^可へ^可る^可か^可た^可のゝ^可う^可ら^可の^可つ^可り^可ふ^可ね^可
2 し^{志可}か^乃のう^乃ら^乃や^乃月^乃のミ^奈み^奈ち^奈て^奈ミ^奈ち^奈ひ^奈な^奈き し^{志本}ほ^能つ^能のか^能た^能の^能波^能ぞ^能な^能きた^能つ
3 さ^佐よ^留ふ^留く^留る^留山^留のあ^乃ら^乃し^乃に^乃月^天さ^天えて 焔^尔に^{本留}こ^留ほ^留るゝ^留ひ^留らの^留水^留海
4 さ^奈ゝ^奈な^奈ミ^奈や^奈秋^奈風^奈さ^奈む^奈き^奈色^奈を見^遠よ ふ^{布留}る^乃き^乃都^乃の^奈月^毛なら^毛す^毛とも
5 な^留み^留の^留う^留へ^留に^留ミ^留る^留た^留に^留あ^留る^留を^留し^留か^留浦^留や 都^可を^可か^可けて^可月^春ハ^个す^个み^个けん
- 式 前 按 菅 ※彰・伊…お

廿三日 閏月 45 秋の15 欠：御製

- 1 月ミつ、人はなこそそのせきもり盤奈に世起毛利しつかなる志可那留夜やひかりそふらん※彰・高・日…よ。※2彰…に 按
- 2 むさしのにはらん雪をあふ坂の乃せきちの月の袖に世起能乃尔流可那みるかな※昭紙「永正八上巳 御着到」 前
- 3 月ミてはミやこもさそとしら川の盤佐登志せきち夜ふかき秋風の空世起可 新
- 4 をのつから関もる人もあくかれて乃津可留可亭ゆくよの月にたれをと、めむ 式
- 5 あふ坂やゆけはいつしかたひ衣阿あらしもおもき関の月かけ可起可 菅

廿四日 紅葉増雨 47 秋の17 欠：御製

※彰・伊：廿五日

- 1 ◆をく露のそめえぬほとををとかしと乃本しくる、木の葉色やそふらん志留能 按
- 2 ◆みる人もとハ、とハなん染つくす流奈徒須よハのしくれの今朝のもみちは乃志農者 前
- 3 ◆染つくす木するとミれハけふもまた徒須个多しくれハ色に残るもみちは志尔者 新
- 4 ◆千人にハいかてそめけんしくれゆく尔以可免个雲一むらの山のもみち葉乃 式
- 5 ◆露霜のした染なくハもみち葉の乃多奈しくれに色のそふもしられし志能志禮 菅

廿四日 擣衣響風 46 秋の16 欠：御製

- 1 ◆衣うつしつかあハれを風のを川志津可連遠乃遠にあつらへつけてよそにしれとや遣天与所尔志 按
- 2 ◆𦵏さむミと山のかせもころもうつ登乃可川をとをそへたるしからきの里遠越多留志可 前
- 3 ◆吹くるハた、さはかりの𦵏風流多佐者可利能尔にひ、きをそへてうつころもかな越天津可奈 新
- 4 さそひくる風留乃多利のたよりのさよ衣堂古た、こ、にしもうつをと川遠留する 式
- 5 八たひ多遠をく霜夜の風尔にひ、き、てしつかきぬたハ千こゑうつ也志津可 菅

※以下三日分記載なし

(廿六日 紅葉映日 48 秋の18)

(廿七日 暮秋露 49 秋の19)

(廿八日 惜九月盡 50 秋の20)

廿九日 初冬時雨 51 冬の1 欠：御製

- 1 昨日^可かも暮にし^可焔の白露も あまりて今朝の時雨とやふる^{里乃}
- 2 時雨^流くる雲のけしきもいつしかに 昨日の秋にかはるそらかな^{爾者留}
- 3 秋風^{爾多}に見したに空の冷しき 雲うち時雨冬はきにけり^{蝶个利}
- 4 定なく降とハいへと神無月 今を時なるはつしけれかな^{越者川}
- 5 さ夜時雨おなし雲よりもる宿の 月もや冬のはしめなるらむ^{於奈利留乃}

按 前 式 新 菅

卅日 風前落葉 52 冬の2 欠：御製

- 1 山風^{爾者利}に落は積りて冬川の 氷らぬ水そしたになかる、^{乃多奈可累}
- 2 行水も風^{爾可留}にせかる、あすか川 かはる測せハ木のはなりけり^{阿須可累}
- 3 さそはる、風^{留耳}に紅葉の色みえて ちるやうつろふ心なるらん^{天地留路奈留}
- 4 散行を何かうらミン吹風の 梢^乃にかへすもみちなりせは^{爾可春奈者}
- 5 影^{耳多}にたに積るともなく山風に さそはれてのミゆく木葉かな^{留登毛奈爾佐者能}

新 菅 按 式 前

閏十一月一日 庭霜 53 冬の3 欠：御製

- 1 をきまよふ色よりみえてをもからぬ 霜にもなひく庭のくれ竹^{満利亭可爾奈乃連}
- 2 冬枯の色をきえみよいとふへき 雪の跡かは庭のあさしも^{遠乃可盤毛}
- 3 松竹のはにをくハかりそれとミて まさこに分ぬ庭のはつ霜^{者遠可利満乃者川}
- 4 庭の面の真砂^{乃能耳}に分ぬ初霜の 草のかれふにみるも冷し^可
- 5 冬^{可留}かる、草のまかきはあさ霜の 花をや花の面影にミン^{能可起盤遠爾}

新 菅 按 式 前

二日 冬月 54 冬の4 欠：御製

- 1 雪^可かとも思ふうちより月とミて 身にしみまさる影のさむけさ^{利登満留乃}
- 2 さゆる夜も見捨ん物^{留可}か落葉する 木のまの月に心つくして^{春留能爾徒}
- 3 いっハと八分ぬ衣もひと、せの 名残そひぬる冬のよの月^{乃名累農能}
- 4 見るま、にやとれる袖もさゆる夜の 水なき空にこほる月かけ^{留屋留留奈起本留可造}
- 5 ふけぬるか夕つけ鳥に霜さえて 月におのへの鐘ひ、くなり^{婦遣留可希天爾乃具利}

新 菅 按 式 前

三日 古屋霰 55 冬の5 欠：御製

- 1 まきのやに音降りか^可ハる霰^累かな^志 しらす板^可まや荒^満まさる^留らむ^舞
- 2 目^尔に見えて音^天にはたて^盤すちる霰^多 こけにむ^尔もる、軒^留の板^多まに^尔
- 3 板^川ひさしくつる軒^者は、音^天もせて^布ふるや霰^能の袖^耳にみ^多たる、
- 4 苔^婦ふかしあれ行^連軒ハ玉^連あられ 音^世せぬにしもお^尔とろか^可れけり^氣
- 5 か^屋ハラやの苔^尔にみ^多たる、玉霰^留 くら^多けて行^留もふる音^盤はなし^奈

新 按 式 前 菅
※のそ、彰・伊・て、日：に

五日 池水 57 冬の7 欠：御製

- 1 氷^留ある池^乃のうき草^株ねをと^佐めて さそ^可ふ水^多さへ行^可かたも^多なし^那
- 2 む^春すひ初^留る池^乃の水^乃のうす^可かれや さ、波^須よする風^留のさ^乃むけ^个さ
- 3 い^毛つもミ^流る池^可のか、ミ^乃の面影^も 冬^耳ハ氷^可にみ^可かきそ^漏へけり^氣
- 4 氷^多そふいくた^乃の池^尔に夕^多残^乃をも お^多しと思^留ふ鳥^可や立^可わ^留かるらん
- 5 あ^株しね^多まてこ^乃やの池^本水^里こほ^尔りゐ^本て に^尔ほのう^能きす^能のう^可くか^可ひも^奈なし

新 按 式 前 菅

四日 暁千鳥 56 冬の6 欠：御製

- 1 夜^可もすから鳴^可てあ^可かしの浦^多千鳥^於 い^多くた^奈ひお^株なしね^可覚^舞とふ^舞らむ
- 2 つ^万まとひ^留し夕^津波^可千鳥^留立^留帰^可る 夕^津残^可やつら^可きあ^可つ^可きのこ^奈ゑ
- 3 そ^遠のか^可つま^万有^乃明^能の月^里のあ^津りつ^連、も つ^連れ^奈なき^起もの^毛と千^奈鳥^奈なく^奈らん
- 4 し^志つか^津なる^可ね^株覚^尔の空^留にこ^都、ふ^尔ハ 都^起に遠^利き川^可千^那とり^可かな
- 5 さ^株夜^可千鳥^楚ね^尔覚^楚さこ^楚そと浦^尔波^尔に 蓬^奈の窓^乃とふ^乃聲^乃のあ^乃は^乃れ^乃さ

新 按 式 前 菅

六日 常盤木雪 58 冬の8 欠：御製

- 1 あ^阿さく^具ミ^留え^婦ふ^可かく^留積^留るや冬^尔枯^奈の 梢^株にな^乃らふ雪^乃のまつ^川か^可え
- 2 松^乃枕^株のつ^留ね^留なる色^遠をい^可かて^可かハ 雪^留ハい^留つ^遠ハる花^須を見^舞すら^舞む
- 3 し^志みの^者はに^可あら^可まし^里かりし 風^毛の音^奈も雪^毛にむ^奈も^奈れて^奈な^奈ひ^奈く色^奈哉
- 4 此^志ま、に^留見る^毛もの^留なら^留ハ降^留積^留る 雪^楚こそ花^起のとき^乃ハ木^乃のか^可け
- 5 楨^株櫓^耳原^阿梢^阿は雪^奈にあら^奈そ^奈へと 枕^多たつ^川山^奈そ猶^奈ま^奈き^奈れ^奈なき

新 按 式 前 菅

七日 深雪 59 冬の9 欠…御製

- 1 かは^者かりも積^連れる物を通ひちに^古乃^留の山こえ
- 2 冬^可ふかさむき日数も降雪^能の^遣けぬるうへにそつ^尔もりそひぬ^留る
- 3 降^徒まてに岩本も分すうつも^連れて^天雪のそこにもな^尔れる庭^可かな
- 4 深山ちよ絶^天ていく日そ都^尔にハ^可としハ^利かりの雪もみさ^利りき
- 5 山^毛ひこもこたへやあへぬ足^多曳^乃の^可な^那たこ^奈なたの雪折^能のこゑ

新 按 式 前 菅

九日 寄雲恋 61 恋の1 欠…御製

- 1 隔^留ある中^尔にも又ハ^奈なくさミぬ^奈なひくを雲^遠の^乃ならひとをミ^奈て
- 2 一^多たひもな^奈ひかハよしや空^乃の雲^利又立^多帰^里りへたてありとも
- 3 よそにミ^留るかひこそな^奈けれ人こゝろ^个思^遍ひへたつ^留る嶺^能のしら雲
- 4 い^可かにせ^尔んいもせ^以の山^乃の嶺^乃の雲^可かけて思^可ふも隔^可行^可身を
- 5 山^遣あらしハ^遣けしきゆふへ身^尔にしれ^連ハ^遣けに横^遣風もよその明^本は^能の

新 按 式 前 菅

八日 歳暮 60 冬の10 欠…御製

- 1 日数^多たにうつ^川りゆく身^能の^可かなしきに^奈猶^乃一とせ^利のけ^个ふそ暮^留ぬる
- 2 人^尔毎^多に何^尔したふらんかそ^連ふれハ^尔我身^津につも^毛る年^留の名^利こ^利りを
- 3 た^多かうへも年^乃のこゆるハ^留か^留はらねと^奈身^可にな^可けかし^留き老^可の坂^奈かな
- 4 くハ、れる冬^亭の日数^遠やくれて行^留年^留も名^留残^留を思^留ふなるらむ
- 5 な^王にわ^尔さに身^尔ハ成^登ぬらん暮^登て行^登としのおも^可はんそ^奈のか^奈ひも^奈なし

新 按 式 前 菅

十日 寄風恋 62 恋の2 欠…御製

- 1 思^可ふか^多たにつ^津たへや^留すと吹^登風^尔に^尔我^遣ことの葉^遣を^遣ち^遣らしてや^遣ミ^遣む
- 2 な^那にとなく思^可ひう^留かる、夕^尔にや^尔め^尔にミ^遣ぬ風^遣も身^遣を^遣し^遣ほ^遣るら^舞む
- 3 我^登そ^毛とも^志し^須は^可い^可か、吹^耳風^耳に^遣身^奈を^津ハ^奈な^津し^津つ、通^津ひ行^津とも
- 4 た^多か^多たのま^尔つ^可にか^留ひ^留ある音^連つ^乃れの^尔我^能に^能のミ^津猶^可つ^可ら^可き^勢夕^可かせ
- 5 独^利り^尔ね^奈にな^可にか思^可はん手^乃枕^尔も^免人^尔のた^能めに^能そ風^能ハ^能いと^能ひし

新 按 式 前 菅

十一日 寄雨恋 63 恋の3 欠：御製

- 1 こぬ人^古にうらみハ^可かけし哀^王わか^可 身^遠をしる雨や空^耳に浮^个けん
- 2 情あらハ^佐さハらしものを雨^乃のよと ことハ^古りかほに^利いふも^可うらめし^本
- 3 しらせ^世ハ^留や又さハ^留ること待^留わふる 夕^乃の雨ハ^可わかな^多みたそと^登
- 4 あハ^連れともみ^毛すハ^可かひ^奈なし降^尔雨に ぬれ^連つ、ゆ^可かん^利い^可まり^利の道
- 5 深水^留のまさる思^可ひもかな^奈ひなくハ 涙^乃のし^志つ^津く雨^多とたに見^し

式 新 按 前 菅 ※彰：す ※伊：いる 兼

十三日 寄煙恋 65 恋の5 欠：御製

- 1 これ^可か行^可おもひを水^乃のけ^个ふりに^利て な^奈みたの川^尔に身^志ハし^川つミ^遠け^利り
- 2 下^能もえの思^乃ひの煙^春ともすれハ い^可かて^奈なき^起なのよ^楚ぞに^多たつ^ららん
- 3 人^奈のうき^盤なには^多たて^者しとか^乃はら^尔やの 下^尔に煙^留のく^留ゆる^留くる^留し^留さ
- 4 思^留ひある身^能の夕^遠暮^尔を空^乃にみ^尔よ 人^利の上^多より^个た^利つ^可け^可ふ^可り^可かは
- 5 ほ^本のか^乃にも^可見^遠しを^个もひ^利の夕^屋け^可ふ^可り^可 や^可かて^可立^可そ^可ふ^可面^可影^可もう^可し

式 新 按 前 菅 ※彰：らしイ

十二日 寄月恋 64 恋の4 欠：御製

- 1 月^尔にこそ^者はる^留けも^屋やら^能ん身^須のう^可さの 扱^可しもあ^可ら^可す^可そ^可ふ^可お^可も^可ひ^可かな
- 2 見^留る影^乃のくも^留る物^奈ゆへ^可月^多ハな^舞とかな^舞らす袖^多のな^多みた^多と^多ふ^多ら^多む
- 3 きぬ^徒くのつ^連らさ^多やい^尔つれ^留いた^留つら^留に 待^留夜^留ふ^留け^留ぬ^留る有^留明^留の空
- 4 こ^古ひしさ^尔や空^留にミ^留つらん^留みる^留ま、に^春涙^留す、む^留る月^可の^可かけ^可かな
- 5 草^乃の原^流思^尔ひ^志定^多て^可みる^可月^可に 猶^農も^可した^可ふ^可人^可の^可かけ^可かな

式 新 按 前 菅

十四日 寄山恋 66 恋の6 欠：御製

- 1 今^者ハ、や^可は^可れ^可ぬ^可こ、ろ^乃の雲^毛ま^可ても か^可ゝる^累やと^能この^利ち^地り^留ひ^留ち^留の山
- 2 た^多か、らん^利限^利りも^利あ^利らし^利塵^利の身^利の 思^利ひ^利積^利り^利て^利山^利と^利成^利な^利ハ
- 3 は^者か^可なく^那も^可い^可つ^可ま^可て^可人^津のつ^連れ^那なさ^能を ミ^能の、^乃を^乃山^乃のま^世つ^世こと^世に^世せ^世む
- 4 我^里思^多ひ^留ち^留り^留た^留に^留積^留る^留なら^志ひ^舞をも し^舞らぬ^舞心^舞ハ^舞山^舞と^舞や^舞ハ^舞ミ^舞む
- 5 又^毛あ^毛ハ^毛ん^毛み^毛ち^毛とも^毛人^連ハ^連頼^里れ^可す あ^里り^可し^可ハ^可夢^可かう^川つ^乃の山^乃こ^乃え

式 新 按 前 菅 ※彰：伊：の。伊：け

十五日 寄杜恋 67 恋の7 欠…御製

- 1 我^多たにもい^乃はての杜^乃の^者ことの^能はの 色^尔に出^遠ぬを誰^毛もらすらむ 新
- 2 物^奈おもふ^多なミ^多たもろ^志さも身^志にしり^乃ぬ おい^乃その杜^乃の木^志、の^多した露^多 按
- 3 名^尔に残^乃るあ^乃いての杜^乃の^志した道^多ハ ふ^婦ミ通^天ひても^可かい^奈や^可な^多からん 前
- 4 朽^留ぬるも^乃いつ^能の木^利の葉^志そ身^能より降^毛 涙^志ハしら^能し衣^利手の^多もり 菅
- 5 な^可にか世^耳にし^志るて^以いく^具たの松^乃の露^可 か^留ゝる歎^伊ハと^もふ人^も■^もなし 菅

※高・日・影・伊・も

十六日 寄関恋 68 恋の8 欠…御製

- 1 立^尔田山夜半^尔にとい^者しひと^奈のはや 関^利となりても通^个ひ絶^个けん 新
- 2 忍^楚ひ侘人^楚めをおも^楚ふこゝろこそ か^利よひ関路^个の戸^个さしなり^个けれ 按
- 3 関^里も^毛り^奈なにかか^可こた^多んう^多き人^地の こゝろ^留ゆるさ^留ぬ中^那のか^地よひち 前
- 4 い^可つ^多まてか我^利た^多めなり^利しよ^多ひく^多の 人^那のか^多よひち関^多守^多もなし 菅
- 5 夢^尔路^尔にもよ^乃へく毎^乃の関^留やも^留る う^奈ちも^奈ね^奈なく^奈に物^盤思^盤ふ身^地は 式

十七日 寄海恋 69 恋の9 欠…御製

- 1 見^留るか^可う^能ちの面^多影^多た^奈にも人^奈は^奈なと かけ^可ハな^奈れた^多る夢^多のう^多き橋^多 新
- 2 わ^多たつ^多う^乃みの^乃かつ^能きのあ^能まのつ^能くも^能う^能ミ い^婦ふ^可か^奈ひ^奈なし^日や思^日ひ乱^日て 按
- 3 舟^留よする^利た^万よりも^万いま^乃やこ^乃しのう^乃ミ 人^乃の心^乃の波^以のあら^以いそ 前
- 4 つ^徒らさ^乃のミ^尔こゝろ^利に人^乃ハあ^乃り^乃そ海^乃の 濱^耳の真^多砂^多も数^多に^多たら^多めや 菅
- 5 か^可りに^多た^多に^流みる^奈め^以なく^可て^可ハ^可い^可かに^亭して あ^能ふ^多ミの海^多の名^多を^多た^多のま^多ん 式

十八日 寄橋恋 70 恋の10 欠…御製

- 1 あ^可たな^多れ^多や^多やか^多て^多ま^多さるゝ面^多影^多ハ こゝろ^多にかゝ^多る夢^多のう^多きは^多し 按
- 2 初^多瀬山^多いの^多契^多を頼^多ても な^多をそあ^多やう^多き宇^多治^多の川^多ハし 前
- 3 絶^多ハてゝ^多待^多らんと^多たに思^多ハしを さ^多も人^多ことや^多う治^多のハ^多しひ^多め 菅
- 4 う^多つゝ^多にもこゝろ^多ゆるさ^多ぬ契^多りに^多ハ い^多かゝ^多わたさん^多夢^多のう^多きハ^多し 式
- 5 う^多かれ^多きて^多しらぬ^多海^多へ^多による^多舟^多も 風^多のた^多よりハ^多又^多もこ^多ぞあ^多れ 新

※日…この部分完欄

※影は、十七日寄海恋の1の新宰相の和歌、歌題に呼ぶ。日・高は、十七日寄海恋の1の新宰相の和歌が、1の前にある。
※伊は、5の詠者の記載なし

廿一日 寄宿木恋 73 恋の13 欠：御製

1 古多屋達 こと木たにやとれハやとるならひにて あらぬ恋する身ともいかな 菅

2 ◆ 見^春すやい^可かに^尔かり^可そめ^利なから宿木の^乃ねさ^祢しか^春ハすも^婦ふか^可き^地ちき^利りを式

3 頼のた、かりそめなからやとり木の
かれぬ契の色をミるには

4 君そつらきたねし残れハ宿木 あらぬ契もなきならひかハ

5 あひ思ふ契ならずはやり木の
阿 奈 須 盤 屋 利 能
をのつからなる色ハたのまし
遠 津 可 奈 留 多

廿一日 寄杣木恋 74 恋の14 欠：御製

1 ◆ 袖川やくたす筏にさすさほの 多須耳本乃 さしてもいつの暮をたのまん 乃越多 式

2 うらむそよいつみの乃多津の盤耳可津柚木たつ民の心は我にひかぬつらさを

3 行雲のミを乃の柚木連利のそれよりも 人の心飛そひくにつ連奈起れなき

4 引津留すつる峯の川可多杣木よまつかたの誰尔連奈起遠个につれなき色をみえけむ

5
 以可尔
 いかにしてひかぬ日もなき柚人の
 可奈起
 乃
 我になけきの数ハそふらん
 尔奈

※彰…るイ。日・高・伊…な

廿三日 寄朽木恋 75 恋の15 欠…御製

- 1 古^{能者}のことはも今^可ハかゝらて身^可ハかけの 朽木とのミや思ひなすらん
- 2 朽木ともいふ^{遍起毛}ものそ川となる 涙^乃のそこにしつむまつらは
- 3 なき世^{起耳}にといとハるゝ身^留ハ山陰^尔に 松木のありのすさミ共^須ミす
- 4 つた^{津多}の葉ハ猶^可煖かけてミやま木の 心^乃の色や朽^乃のこるらむ
- 5 我^奈やなに朽木^能の柳^多それたにも 逢^連ことたのむ春もこそあれ

式 按 前 新 菅

廿五日 寄忍草恋 77 恋の17 欠…御製

- 1 夕暮ハ思ひもいたせ^多すむ宿^春の 軒^尔ハの草の名に忍^{登毛}ふとも
- 2 身に近き秋^志そしらるゝ、我宿^留の 軒^乃の忍^留ふの色をみるにハ
- 3 こゝろ^世せよ軒^農の忍^尔ふも袖^多の露^乃の 煖^多にハたへぬかきりこそあれ
- 4 おり^利にあへハ軒^乃の忍^尔ふの夕霧^多も 涙^乃の色にみたれ^{地留}そちる
- 5 あま^{阿乃可留多}のかるたくひならねと草^{乃能}の名の 人^尔めにつらきうらもわり^{王利奈}なし

式 按 前 新 菅

廿四日 寄初草恋 76 恋の16 欠…御製

- 1 初草^{乃可利}のゆかりの色を尋^遠てそ 露^{乃可}の契^留もかけて見るへき
- 2 ふか^{婦可}、れや見^連そめしよりも初草^利の おひ行来^多をたのむ心ハ
- 3 かけて^可たにまたうらわ^多かき初草^乃の 露^{楚多}の契^{楚多}ハえこそたのま^年ね
- 4 萌出^万し春の雪^{里那尔}まわりなきにや は^者や初草^乃の秋^乃の夕しも
- 5 枯^世やせん茂^利りやそハん初草^{保留}に おもひも分^{保留}す露^{保留}そこほるゝ

式 按 前 新 菅

廿六日 寄思草恋 78 恋の18 欠…御製

- 1 たね^多とてもよそにや^尔はある思草^{能阿留} こゝろ^能のうちにしけるハ^留かりそ
- 2 うき中^{能尔}の秋^多にも枯^連ぬたねしあれや お花^可かもとの草^{能株}のねさしハ
- 3 いつ^乃の世^可のたか恋^里ちよりおもひ草^多 たね^利とりそめておひ初^个けん
- 4 をく霜^留の野^留ハうらかるゝ跡^留までも 思^能ひや草^能の名を残^留すらむ
- 5 色^遠にをく露^{遠奈}をなみたの思^{徒留}ひ草^{可利} うつるハ^{免天多}かりもそめてたにミ^多む

式 按 前 新 菅

廿七日 寄下草恋 79 恋の19 欠…御製

- 1 かれくの身のたくひにもみるそうき 冬野に残るしものした草
可多尔
- 2 我思ひはていかならん限りあれハ 色にみえけるまつした草
者可奈利連个流川乃多
- 3 しらせハや人の心はあら磯の 波のした草みたれわふとも
志世乃盤乃志多
- 4 恨侘身ハ消かへるした草の 霧の行多をおもふあハれむ
可留志多衛遠志舞
- 5 しつミても人をみるめのうしならハ 身におひかハれ波のした草
志川毛远流能乃志多

按 前 式 新

廿八日 寄忘草恋 80 恋の20 欠…御製

- 1 ◆我にうき人のうへける草の名の 忘ハてなてものおもへとや
耳天
- 2 忘草しけるをかるゝはしめにて またきに人の恹そしらるゝ
志遣留遠可留者免尔多起尔乃志流
- 3 我のミとつむもはかなし草の名の 人ハおもハぬ忘かたみを
者可那能可多
- 4 忘るゝや忘れさるらん草の名の たねとりそめし心はかりハ
留留乃能多利免者可利
- 5 身には扱いかにたねまく忘草 人のちきりの花の見るにも
尔盤可多乃利留尔

按 前 式 新 菅

廿九日 眺眠易覚 81 雑の1 欠…御製

- 1 ◆あふ坂の関ちおほゆる鳥かねに おとろく夢の末もとをさて
阿本留可那能
- 2 ◆ねふりさへ打おとろくや侘てよを ふる霜雪の眺の空
祢利天布留乃
- 3 ◆眺ハおいをまつしるね覚にも うき世の夢ハいつをまつらん
遠累祢尔乃遠
- 4 ◆身のむかしおとろきなれし鳥かねも 老ハまたるゝね覚とそなる
可可奈可多留祢奈留
- 5 ◆眺はなにゝおとろく老ならん まとろむうちもまとろミハせず
盤奈奈袁世須

按 前 式 新 菅 ※影：むしろ

十二月一日 窓燈 82 雑の2 欠…御製

- 1 ◆かゝけても我身にくらき灯ハ 残るかひなきまとのうちかな
可遣毛留可奈起満可那
- 2 ◆いたつらにかゝけつくせハミるかうちも 我身にくらき窓の灯
以多津可遣津流可乃
- 3 ◆うつもるゝ竹は水面の雪の夜に 光あらそふ窓のともしひ
津毛留整乃尔
- 4 ◆まなハねハつらき心のいたつらに むかふそおしきまとのともし火
那年尔可
- 5 ◆むかひみよわりなきかへのひまをたに もとめしものを窓の灯
可与里奈起可乃多遠乃

按 前 式 新 菅

1 ◆ 住吉や松の千とせもいくかへり 乃以可利 神さひわたるなみかせのこゑ 多留奈可勢農 式

2 ◆ とふ人^ルにみつともいハ、よさの海^乃の
松こそ^{志留}しるへあまの橋^多たて

3 三笠山手向まつなり松かえも 終にハかれぬ色をしるより
川利可 尔可 遠志留利

4 遠^遠可^可那^那を^をろ^ろか^かな^なる^る我^我こ^この^のは^はの^の色^色そ^そへ^へん
盤^盤能^能遍^遍ね^ねか^かひ^ひハ^ハい^いつ^つる^るミ^ミつ^つの^のは^はま^ま松^松

5 身そ独りふり残りける高砂の松も子もたるためし有世に

※彰…お前

三日 名所浦 84 雑の4 欠：御製

1 ◆ よるな^{留奈}ミに^可かたへハ花もさくらあさの^{佐羅能}
 お^乃ふの浦なし身こそおいぬれ^{奈連}

新

2 時をえて人の心もやハらくや
遠天乃屋
 わりのうら波おさまれる世に
利乃累尔

按 ※伊…を

3 ◆ わかの^{可乃}うらや玉ひろ^路ふてふ人な^奈ミの名をハ^遣かけ、ん跡も^可かひなし

前

4 ミクまのころのはまゆふそれよりも 猶いくらへにか世をハいのらん
満者満連利 丹可遠

菅

5 ◆ 吹風のしるへハあれとこゝろとや 身ハまよふらんわか可乃のうらふね

式

四日 名所鶴 85 雑の5 欠：御製

1 ◆ あさりする芦へのたつも和哥の浦に通ふ雲ゐの道やしるらん
阿利留 多川 乃尔 能志留

2 あしたつものなみたしぬ代をうれしとや
阿多川奈多遠
やすきたみの、嶋に鳴らん
屋春起多能尔

3 難波江や塩のひかたの朝なきに
乃可多奈起尔
心とけたるあしたつのこゑ
多留多川

4 いね^{祢利}とりて今やあふみのむしろ田^尔に 君^可か代よハふ鶴のもろ聲

5 ◆ さ夜もは者やふけ婦るの浦遣の波井のよ乃に 月可かたふきえてたつそ鳴多なる那

式

五日 野風 86 雑の6 欠：御製

1 ◆ 野を遠ミしハふにつゝくをさゝ原一むら高き風の音かな
遠志 尔徒具 遠佐 起乃可那

按

2
は^者け^具しくもゐ^毛なの、^井末^奈に吹落^能て
を^遠さ、^尔にさやく山風の音

前

3 野となりて秋風さむきこの里に
利
古乃
尔
 たか行来とてうつゝ鳴らむ
可

菅

4 ◆ 吹遠流利をくるかきりやいづくむさしの、
草者はに残る露乃の夕風

※彰・伊・鶴
新

5 ◆ 草ルに吹風乃の行末もひろき野能の一木乃の松ルに残るこゑ留かな可那

式

六日 橋雨 87 雑の7 欠…御製

- 1 涙のミ^可まつ夜の雨にかたしきの^能袖^{以可者利}いはかりうちのはし^{能者}ひめ
- 2 川橋をあらそふ聲や市人の かさもとりあへぬ雨の帰るさ^留
- 3 さそ^{佐那}な人もみちの橋の過^可かてに^留くる、けふりの秋のむら雨^利
- 4 ◆雨ハる、雲のかけ橋末絶て 入日の山をわ^可くるむらさめ^免
- 5 ◆行人はしはしと絶えて音するや^留いた、の橋にか^可るむらさめ^流

按

※彰・伊…「か」なし

前

菅

式

※高・伊…た。 ※2新兼

式

八日 旅行 89 雑の9 欠…御製

- 1 都出し名残^遠をおもふくるしさよ 野山の道もか、らましやは^羅
- 2 行人^耳におもふもゆかし清見^可かた 関ちの末のミおのまつ^能ハら^{乃川}
- 3 友なひて行跡うつむ白雲も はなれハ山の旅やう^可からん^{者奈}
- 4 くるしくも分こし跡の程なきハ^留いかにさかしき山路なるらん^{以可尔 奈留}
- 5 たかしたふ袖とはなしにをくれぬや 都の月のよな^乃の影^{与奈 能}

按

前

菅

新

式

七日 渡舟 88 雑の8 欠…御製

- 1 ◆こ、ろせよまた明^{古 与多屋}やらてはやきせを^者ふね漕いたす淀^{遠 年多須乃}の川長
- 2 ◆思ひをくる淀^{遠 累乃里}の渡りの明^{本乃尔}ほのに 浦風遠き舟のゆく末^農
- 3 ◆夜やかき舟よふよとの川岸に きたふる里のこ^{多 留乃}ゑか^可す^可か也
- 4 ◆渡し守^{王尔}われにこと、へすみ^{春多}た川 なにおふ鳥もミやこやハ^留しる
- 5 ◆鳥の名にな^{乃 奈利遠}こりをとめて角田川 こき行^年ふねもおしき^遠汀を

按

前

菅

※彰・伊…かはす

新

式

九日 旅宿 90 雑の10 欠…御製

- 1 行末をいそくとしらハ枕^{具 志奈}なと かりねの夢^{可利 祢遠可}をかへ^{春 留登}するさと
- 2 都出^{天可}てかりねの床の山風そ また聞^{多 奈}なれぬ袖^{尔者遣}にはけしき
- 3 心ある人^{耳 満可須累}にまかする旅のやと いつの契^{乃 利}りの行^{衛 奈}えともなし
- 4 明やらぬあらしの枕^{以可尔 世}いかにせむ 夢より後のさ夜^{利 乃}の中山
- 5 夢のミやおなしミち行^{於奈 可利}かり枕 あまた旅ねの宿^{多 乃}ハかハれと

按

前

菅

新

式

十日 旅泊 91 雑の11 欠：御製

- 1 塵の世にうきたる身ともしら波や 舟にのる夜そおとろかれぬる
2 忘れすひゝきのなたの浦風も 猶うしまとに舟やとめまし
3 むしあけの松をとまりのよるの夢 風をそたのむ波の枕に
4 よしさらハ又漕出んとまり舟 夜るとてしはしねんかたもなし
5 とまりとてなにあら磯の波枕 ねられぬものをこきや出まし
- 式 新 菅 前

十一日 山家路 92 雑の12 欠：御製

- 1 いかにしてすむへき山の奥ならん こけたに高き一道の岩木を
2 思ひ入人は稀なる山里の 道こそたゆれみちし有世は
3 山ふかき栖のミちハこけのはに ふむ跡みえぬ岩ねまつかけ
4 人かけハ稀にもみえぬ山里に 残るはいつの道の一すち
5 山里は三かひとつの道をたに 有かなきかに残すあはれさ
- 式 新 前 按 菅

十二日 山家鳥 93 雑の13 欠：御製

- 1 すむも今山のかひある身になして しらぬ鳥にも我そ馴行
2 たれかきく軒ハの山の松の風 たゆめハ鳥の声のさひしき
3 すむ鳥もうき世のあみをのかれきて 松の戸ほその友となるらし
4 山里ハなにハかりなる情とて ねくらの鳥の我をとふらむ
5 すむ人はありともみえず柴の戸に 深山の鳥のちかく鳴こゑ
- 式 新 前 按 菅

十三日 田家煙 94 雑の14 欠：御製

- 1 暮かゝるいなはの雲に立そひぬ 小田の庵にたつるけふりは
2 なるをかや田つらはるかに見渡せハ 葎の宿ぞ煙さひしき
3 うすくたつ田中の庵の夕煙 うへに色こきはるの一むら
4 なひきあふいなはの雲も色くれて 煙さひしき小田のかり庵
5 もる小田のかりほにたつる夕けふり なひくいなはの雲かあらぬか
- 式 新 菅 前 按

十四日 独述懷 95 雑の15 欠：御製・邦高親王

1 ◆ともすれハ世をうらむるそをろかなる 我身ゆへとハおもひはてなて
春 遠 留 遠 可奈留 者那

按

2 位山おくそゆかしき絶く 分のほりけん道ハあるらし
於 可 尔 本利遠 留羅

前

3 ◆うき事の数をハしらていふ人よ 独りかたへに世をなけくらむ
乃 遠 志 与 利可多 尔 遠奈

菅

4 ◆いとふともさらにハいハしをのつから 数ならぬ身をよの外にして
毛 尔 遠乃津可 奈 遠 能 尔

新

十五日 老後懷旧 96 雑の16 欠：御製

1 いくたひか思ひ出らん老の波 立もかつらて過しむかしを
以具多 可 可 可

按

2 其こと、思ひわかすも忍ふこそ 老のね覚のむかしなりけれ
王可須 乃 可 利个

前

3 程もなき身のいにしへを思ふにも 老ハかなしき行末のそら
奈起 乃 尔 遍遠 尔毛 可奈

新

4 をろかにてさすらひにし年月を 思ひ出るも老そかなしき
可天 尔 遠 留 可那

式

十六日 往事如夢 97 雑の17 欠：御製

1 はかなしと世をなとなけくうつゝをも 夢のうちとハおもひ定す
者可那 奈 奈 津 遠

按

2 ねぬにみる夢とうつりてとまらぬハ いく年くの春秋の色
祢耳 利 満 以具 乃

前

3 忍ふへき我世のことのなき身 夢にならても何をうらミむ
遍起 能 耳奈 毛 遠

菅

4 夢ならハ又もミるへきふることの 猶はかなきハうつゝなりけり
奈 留 者可奈 利个利

新

5 移り行世ハまほろしの春の花 小蝶の夢のさめぬはかなさ
利 本 乃 者可那

式

十七日 神祇 98 雑の18 欠：御製

1 いつれなをふかきちかひそ石清水 みもすそ川のすゑの世迄も
連奈越 可 毛 乃春

按

2 末遠くおさまれとてや 八万代 神てふ神の世をまもるらん
満連 乃 毛累

前

3 よろこひの袖返しえぬ九重の 神もことハれ君もしるへく
遍

菅

4 小塩山今の神世の月かけハ くもらぬ空にまつかせそふく
乃 可遠 耳 川可勢

新

5 君か代ハ更にさかへん三笠山 峯の榊葉ときハかきはに
可耳 可 乃 可起者

式

※彰・伊・高・日：には

※彰：八百萬

十八日 尺教 99 雑の 19

1 こゝろなと猶満まよふらんふたつなく 三奈起なき法の道ときくにも 按

2 志留しるへせし雪の山人なかりせハ ふかきをしへの世に残らめや 前

3 乃力さきの世にをくれをこそなけくなれ 後の佛の数にもれめや 菅

4 佐利さととりては佛もなしと思ふこそ ときをく法の力なりけれ 新

5 乃毛たのもしな此世にむまれあふ事の やかて仏にちかきをしへハ 式

十九日 祝言 100 雑の 20

1 かしこくもおさめしる代の行末も とふにまさしきうらやすの國 按

2 君か代ハ大うち山の姫小松 いく十かへりの花にちきらん 前

3 古遠こん春をいそくもさそな君か光 たかきさくらにまつそあふらん 菅

4 耳満天にまもりこ、におさめて神と君 一尔ミちにや世をめくむらん 新

5 尔満百敷にますみのか、みくもりなき 君かみかけをさそまもるらん 式

元和第六 三月日 書之 ※この末尾記載は、高・日にもあるが、彰・伊なし。

六 永正十六年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌の翻刻

永正十六年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌

―宮内庁書陵部書陵部所蔵「御着到部類」(五〇一―七九七) 当該部分の翻刻―

宮内庁書陵部蔵「御着到部類」の五番目(画像83コマ目から95コマ目)が永正十六年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌である。ただし、下冷泉為孝の一句と「夏冬」の四月四日(三十一日目)首夏から五月三日(六十日目)都鄙歳暮までの三〇日間分のみである。これを底本として翻刻した。この着到和歌は後柏原天皇を含め十人の詠者によるもので、後柏原天皇の最後のものである。歌題は「春秋」三〇首、「夏冬」三〇首、「恋雑」四〇首の構成で、文永八年六月一日宗尊親王主催歌合で用いられたものである。現在確認できている原本は、①四月十九日雪中興遊、②四月二十日五月雨晴、③四月二十一日千鳥曉鳴、④四月二十二日照射である。

この書陵部蔵「御着到部類」以外の写本は、①国立歴史民俗博物館高松宮家伝来禁裏本「禁裏御著到和歌」、②国立公文書館内閣文庫「日次歌集」、③宮城県図書館伊達文庫「近代著到和歌」、④水府明德会水戸彰考館本「近代著到(近代著到和歌)」の四本である。翻刻における注(※)での略称は、①…高、②…日、③…伊とする。

底本は四月九日秋の二から五月二十一日恋の七までの四十一日分が欠落しているが、①から③の他本も同様である。従って、これらの親本は同一系統と考えられる。

(凡例)

- (1) 月日(或いは日付)・歌題の下に、起日三月三日からの日数を記し、さらに春秋・夏冬・戀雑の各部での順を記した。例えば、四月「十五日 雪朝遠樹 夏冬の12」は、42日目で夏冬の部では12番目という意味である。
- (2) 各日(各歌題)に十人・十首あるはずである。和歌の頭に先頭から順に算用数字でその順番を記した。底本では、例えば四月二十四日鵜河蛭(夏冬の21)の場合、本来十首あるべきであるが、八首しかない。この場合、欠落している詠者を欠としてその名を記した。
- (3) 上の句と下の句の間を二文字分空けて一行に記し、最後に詠者を記した。詠者は底本の記載通りにした。また、平仮名の字母は、右側に小さくそれを記した。
- (4) 網掛けを施した部分は、※の後に注記した。※のあとに略称がないものは、この書陵部蔵「御着到部類」についての注である。例えば、「※お無」の場合、網掛けの字の右側に記されている注書きである。「※日…」の場合は、国立公文書館内閣文庫「日次歌集」では異なつた記載である。原本と照合した場合、「※原…」とした。
- (5) 後柏原天皇の詠歌は、『列聖全集』御製集六「御百首部類」の七番目に「御百首」として収録されている。底本と対照して異なりがあれば、「※列…」として注記した。
- (6) 貞敦親王の詠歌は、『私家集大成7中世V上』に101から200まで(伏見五一〇)と233から341まで(伏見五二八)に掲載されている。そこで、詠者名(例えば敦)に続けて、『私家集大成7中世V上』の番号を記し、底本と対照して異なりがあれば、「※私(番号)…」として注記した。
- (7) 三条西公條の詠歌は、『私家集大成7中世V上』の「称名院家集」に右肩に「御着…」と注記され一部が掲載されている。そこで、その場合は、「公條」あるいは「條」の下に「称名院家集」の歌番号を記した。また、底本と対照して異なりがあれば、「※称…」として注記した。
- (8) 底本は夏冬の部の三〇日分であるが、(5)・(7)の刊本の情報を反映させて、可能な限り永正十六年三月三日起日後柏原天皇主催着到和歌の全貌を提供できるように努めた。

三月三日 歳中立春 1 春・秋の1

冬の日のすゑのまつ山年こえて おもへばかへる波のまもなし
春は今二かみ山のみねの雪 またふるとしを霞へたゝて

御製
貞敦 二三三

九日 水郷柳 7 春・秋の7

にごる名もなにかたつ田の河水は みどりにふかき青柳のかげ
橋姫のこれやかさしの玉柳 面かけ匂ふうちの河かせ

御製
貞敦 二四三

四日 六月立秋 2 春・秋の2

夕すずみ風さやかにて水無月の ひかりながらに秋やたつらむ
みな月のてる日涼しくかけるひて かたへ秋たつ雲のかよひち

御製
貞敦 二三四

十日 故郷萩 8 春・秋の8

秋萩のふる枝ばかりぞふるさとの 草木がなかの花にのこらむ
真萩原うつろひかはる花の色を 秋にことはる露のふる郷

御製
貞敦 二四七

五日 霞遠山衣 3 春・秋の3

山は今朝かすみのころも春やとき 花やおそきとにほふ色かな
をちこちの山の緑に染めわけて にほふ霞や春のころもて

御製
貞敦 二三五

十一日 溪蕨 9 春・秋の9

山づとこの頃たれにころざし 深き谷にもわらび折るらむ
谷陰は去年の木ののはの下蕨 もえてやひとり春をしるらん

御製
貞敦 二四八

六日 霧織女帳 4 春・秋の4

ほしあひの夜や明るるまも久方の 天の戸ばかり霧にとちめて
あくる夜をたちやへたてん天河 霧をとほりのあふせなりせは

御製
貞敦 二三七

十二日 砌蘭 10 春・秋の10

いかにして芝の砌のふぢばかま ぬしとなる名をわれに残さむ
藤はかまぬきすておきし人香をも しらせて匂ふ庭となりせは

御製
貞敦 二五一

七日 梅香留袖 5 春・秋の5

梅が香はくらぶの山もたどらじを 袖にぞ花のやどりとりける
花なから袖の中なる梅かゝや 風のさそはぬ匂ひなりけり

御製
貞敦 二三九

十三日 春月 11 春・秋の11

あけぼのの春とやしたふ人ならぬ 霞のそでもきぬぎぬのそら
みすもあらぬ月を霞にかこちても 又みしか夜の春の一時

御製
貞敦 二五三

八日 萩音近枕 6 春・秋の6

小夜まくら風吹かでも萩の葉は 音するものかしづかなる空
ねや近き萩の葉風やよもすから 秋のつらさをつけのを枕

御製
貞敦 二四一

十四日 秋霧 12 春・秋の12

そこたなくうきたつ霧の朝じめり 身にしむ物の袖におぼえて
暮ゆくと空にはみせて残る日や 霧のうちなる野山なるらん

御製
貞敦 二五四

十五日 春曙 13 春・秋の13

あけぼのの春とやしたふ人ならぬ 霞のそでもきぬぎぬのそら
むら／＼に山きはみえて鳥の音も 霞をいつる春のあけほの

御製
貞敦 二五八

十六日 秋夕 14 春・秋の14

花ならぬ千ぐさにもを思はせて 袖にいろこき秋のゆふつゆ
夕暮は露のほかなる袖もなし 我身にかきる秋ならねとも
露とだにおきてや色に出でぬべき 心のそこの秋の夕ぐれ

御製
貞敦 二五八
公條 六一四

十七日 春風 15 春・秋の15

秋のこゑに吹きかへむ程も目のまへの 若葉になびく枝の春風
天津雲かすみをかさなる空を分かねて 風も春にややとりとるらん

御製
貞敦 二五九

十八日 秋雨 16 春・秋の16

散りそめし一葉も日日につもりそふ 庭にさびしき雨の音かな
夕日影雲吹かせもうつりあへす 山本はる、秋のむら雨

御製
貞敦 二六二

十九日 初花 17 春・秋の17

なべて世にまたれてとくる花の紐 われならでとは何か思ひし
さきにけりまたれていと、長日も かきりありける春の初花

御製
貞敦 二六四合点なし

二十日 新月 18 春・秋の18

かたぶくををしむ空かは夕暮の 月はゆくゆくひかりそひつつ
ほのかなる夕の影も秋きぬと おもふに月の色やそふらむ

御製
貞敦 二六六

二十一日 花盛 19 春・秋の19

あぢきなく今日のさかりに思ふぞよ 花のうへなる露の世の中
さくとみし梢やいそく雲霞 花の外にはみる山もなし

御製
貞敦 二六八合点なし

二十二日 明月 20 春・秋の20

わきて見む月もみちぬるそらをこそ きずなき玉の光なりけれ
明石かたうらはの秋による浪の こゝろにうへこす月やみさらむ

御製
貞敦 二六九

二十三日 落花 21 春・秋の21

花にこし布留の中道ちるまでを 見ずばとこれも物おもふらむ
いつくにかありかさためてつもらまし 風の上なる花のしら雪

御製
貞敦 二七一

二十四日 残月 22 春・秋の22

のぼる日ははや影たかき空の月 雲路やかはるゆくとしもなき
入山を月も名残やおもふらん 光おさまるあけかたの空

御製
貞敦 二七三

二十五日 連日苗代 23 春・秋の23

なはしろに春の日数をつむよりぞ 稲葉かる手の秋もしらるる
引しめのなかき日かけてけふも又 つくる田面や春のなわしろ

御製
貞敦 二七五

二十六日 隔夜擣衣 24 春・秋の24

うちたゆむひまもありけり蟹衣ぬる夜は 夢のみるめかるらむ
さち／＼にたえまかちにもうつころも 夜寒の袖やいたりいたらぬ

御製
貞敦 二七八

二十七日 橋邊藤 25 春・秋の25

花をし谷のいたばしいたづらに 苔のみだれてかかる藤なみ
山河や岸のうき橋春は又 藤さく花の浪のむれ木

御製
貞敦 二八〇

二十八日 澤畔菊 26 春・秋の26

にほるなり嵯峨野のあきのいろいろも 菊ひともの大澤の池
さく草の一もとゆへに匂ふなる 沢の小草も水の秋風

御製
貞敦 二八一

二十九日 岸款冬 27 春・秋の27

川風によりくる波のおのづから 折りてやかへる岸のやまぶき
いはぬ色の花にはさけと岸かけの 蛙やこゑに井手の山吹

御製
貞敦 二八四

四月一日 嶺紅葉 28 春・秋の28

嶺たかみ松よりおくの薄紅葉 そめつくさぬもふかきいろかな
くもるをもしくるとみれば初瀬山 松原にふかき嶺の紅葉、

御製
貞敦 二八六

二日 暮春鶯 29 春・秋の29

うぐひすの涙よかに雪の中の 春はきのふの今日のわかれに
古巢出てなく音につけし春を又 友なひゆくか谷のうくひす

御製
貞敦 二八八

三日 晚秋鹿 30 春・秋の30

この夕しらずはるけき鹿の音は 秋をいづくにおくりてか鳴く
秋よいかにつくの山路かへるらん 鹿はたちとを声に聞にも

御製
貞敦 二九〇

以降三十日分は宮内庁書陵部「御着到部類」(83コマ〜95コマ)

今もなをみそきハさらにせたえなき
みたらし河のせゝの面影

孝

四日 首夏 31 夏・冬の1

- 1 夏衣^古たつことやすき^尔けふ^天にあひて 昨日の花の陰や置らん
- 2 けふ^気とても春の名残^可はうす^可からぬ 心^尔にかはる^者なつ^奈ころも^可かな
- 3 風^可かるき袂も涼し夏^乃ころも 春の色^可にハおもひ^可かへ^奈ねと
- 4 あた^多にミし花^尔に置^徒つるこゝろ^留をハ いか^可てわか^可葉^能の露^能の山風
- 5 昨日^可かの花^能の梢^能の名残^登とて 風^多また匂^多ふ夏^多木^可たち^奈かな
- 6 をく露^可も色^尔の千種^可にみ^可しか^遣けの うつろ^路ひ^可ハて、夏^个はきに^利けり
- 7 時^可ハ今^多ハわか^遠葉^留を花^多とみる^多にたに 猶^可山風^可の忘れ^可ぬ^可ハうし
- 8 し^志けるもや程^奈な^可かる^留らん木^多々の色 うつろ^春ひ^起やす^起き花^可の跡^可とて
- 9 花^志そめ^多をした^可ふのミ^可かハ 朝^本ほ^可らけ霞^可の神^可も立^可わ^津かれ^津つ、
- 10 おほ^本つ^可かな一^可夜^多のへ^乃た^多ていつ^多のまに か^可ことかまし^可き衣^可か^可へ^奈かな

知仁 貞敦 親 秀房 宣 孝 公條 雅綱 為和
一三・二九二 二七五

五日 初冬 32 夏・冬の2

- 1 は^者けし^越さを今朝^可そ都^可に聞^可きそめ^可し 嵐^徒のつて^尔に冬^可やきぬ^可らん
- 2 山^婦ふ^可かくすむ^可やい^可かな^那る冬^能きては 都^乃の空^可も嶺^可のあら^可しに
- 3 吹^可か^留ハる程^乃ハ嵐^可の風^可のまに 空^遣さむ^那け^可なる冬^尔ハ木^个に^利けり
- 4 秋^可のミ^尔か今朝^楚もにし^可そ嵐^者山^遣 は^乃けし^可き音^可の冬^遠を告^可らん
- 5 露^可のまにむ^春すひ^可やか^留ふる冬^流のくる あ^阿した^多の原^能の霜^能のした草
- 6 あ^那らハなる今朝^可の時雨^可よ生駒^多山^多 冬^多たつ空^可ハ雲^可もかく^可さて
- 7 花^毛紅葉^者めてし^可もは^可てハ木^乃枯^可の 身^尔にし^可む外^奈に色^可やな^可からむ
- 8 秋^尔にま^本ほい^連つれ^志し^本ほれ^連し草木^可とも とハ、や今朝^可の嵐^可ふく^可空
- 9 か^可へり^津つる秋^尔に夕^可の雲^可も又 山^天路^可時雨^可て今朝^可や来^可ぬ^可らん
- 10 一^世とせ^尔に秋^遠を長^多月^多とた^堂のめ^可しも た^可、かり^可初^乃の冬^个ハ^利きに^利けり

知仁 房 親 敦 宣 孝 條 綱 和
一三・二九四 八〇〇
※伊・つ・熊。日・つ。称・つ

六日 卯花 33 夏・冬の3

- 1 山可川乃かつの垣乃ねのうち八月雪も 色奈起なき物尔にさける卯留のはな者那
- 2 ふ婦み分多した、雪奈なれや道本ほそき 垣多ねつたひ尔にさける卯花遺留
- 3 月雪能の色をと、むる卯花ハ 夏可さく花とい天満かて見てまし
- 4 卯花乃の色をも梅尔の匂能ひにて このしたやミ多をあ遠やなくやミ奈む
- 5 卯者奈はなを雪登とみるにも時志しらぬ 賤可か垣可ねそよ可そにかくれぬ
- 6 夕利可よりかけみえ衣天そめて有明の 残以可るもいかに庭の卯の花
- 7 さき藤遠を夢奈とハなれてミ留るに猶 世遠を卯花乃の色やそ乃ふらん
- 8 ひ可利阿利かりありと先満留めにとまる卯花の は者那能なのさ可利かりや明本ほの、空
- 9 山可川かつの身遠をうつ木徒可かさ佐く比ハ い以者とはぬ雪遠を垣尔ねにやミ留る
- 10 これや古乃このひ留むるも留るてふ山陰や 柴折可かこふ雪の卯花

親 秀 仁 敦 宣 孝 條 綱 和

一三三・二九六

七日 時雨 34 夏・冬の4

- 1 出屋やらぬ月まつ程乃の山能者のはに 夕留ある雲多もまたしくれつ津、
- 2 おとろきし夢能そまゝとのさ夜時雨 音盤は枕尔にさ佐多ためなく奈ても
- 3 天地とわかれし利能よりの神無月 な佐多とさためなく時雨婦留ふるらむ
- 4 山風乃の雲吹遠をくる跡尔にまた ふ布留るやいつくの時雨具能なるらん
- 5 い登奈つとなくは山盤の雲も色可かへて しく志る、比乃の風のハ遠けし奈さ
- 6 残可る日のかけ時雨耳ゆく村雲に を遠のれ連満可まかへる夕鴉留かな可那
- 7 吹婦はらふ空とハみえ衣須すうき雲を 風留のうへなる村時雨可奈かな
- 8 ほし本侘ぬ日影遠を袖尔屋にやと毛しても 幾度留くもる時雨奈留なるらん
- 9 一利とをり雲遠をあらしに光立天て 月影遠をくるむら時雨可那かな
- 10 世耳にふるもあるにまかせよ雲阿留につれ 風尔多にたくひてゆく時雨哉

仁 親 房 敦 宣 孝 條 綱 和

一三四・二九八

八日 廬橘 35 夏・冬の5

- 1 昔をもわする、草のふるさとに 花たちはなそ匂ひゆかしき
遠王 留 能布 留
- 2 人はいさわれハ昔も見すしらぬ 花橘に誰をしのはむ
鯨 王 志 尔 遠 者舞
- 3 さ夜枕ミる夢ならてう、にも 帰るや昔匂ふたはな
流 奈 留 多 者那
- 4 たちかへり又もとへとやをくるらむ 夕風はたる宿のたち花
多 可 利 登 留 王 多 留 多
- 5 橘の花さく軒の夕風に おもひくらへん袖の香もかな
乃 耳 可 本 志 留 尔
- 6 かりにすむ宿とハいハし橘の むかしににはふ香をしるへにて
可 利 春 可 尔 本 志 留 尔
- 7 見し夢の昔は帰る手枕に のこりて匂ふ軒のたちはな
鯨 留 利 農 多 者奈
- 8 かくはかりむかしをおもふたちはなに 今をも人のまたやししたはん
者 可 利 可 多 者 那 尔 越 多 志 多
- 9 なにことを忍ふにもあらて橘の かことにたる身のむかしかな
尔 尔 乃 可 尔 多 留 能 可 可 那
- 10 露けしな花こそ宿の妻とのミ なかめ侘ぬる軒のたち花
个 那 楚 乃 能 奈 可 免 留 多 多

房 仁 敦 宣 孝 條 綱 和 親

三六六

九日 落葉 36 夏・冬の6

- 1 吹過るあらしの跡の枝よりも こゝろとあたに散もみちかな
留 乃 利 古 多 可 奈
- 2 このころハつきぬ木のはの色もみつ 野風山風ふくにまかせて
古 乃 能 者 能 尔 満 可 天
- 3 ふりしくハ木葉もおなし跡なから つもらん雪の末をしそ思ふ
布 利 志 具 奈 奈 可 能
- 4 木葉散あらしの末ハ山水も こゝにおちくるさ夜の手まくら
流 乃 満
- 5 染つくす色よりもろく散ハて、 うすき梢そ秋を残せる
徒 頻 世 流
- 6 木葉先つもりハて、は山陰に 雪をや奈の風も吹らむ
毛 利 鯨 尔
- 7 落つもる庭の木葉に跡つけて ふきまく風の音伝もうし
徒 毛 乃 尔 遣 満
- 8 散そひて霜に朽ゆく色をみよ 思へハ焔の木葉ともなき
天 尔 遠 乃 奈
- 9 たか袖か色にみえても山風の ゆくてにハらふ木葉なからむ
多 可 可 毛 乃 婦 奈 可
- 10 木枯やねたましかほに踏分る 跡をもみせぬ庭のもみちは
枯 多 満 可 本 尔 世 乃 者

敦 宣 孝 條 綱 秀 和 仁 親

一三六三〇二

八二四

十日 早苗多 37 夏・冬の7

1 以具 耳 奈 乃王 奈 歸留 奈 遠 利 能 敦 一三七三〇四
いく里にひまなき田子のわきならん うふるさなへをとりくのこゑ
※私三〇四…いく里の田子の手まなくいそくらん うふる早苗をとりくの声

2 遠 留可 天 利 春 那 聲 乃 遠 宣
植をくもいるかに見えてとり残す さなへはいつの雨をまつらん

3 遠 留 可 爾 留 孝
湊田やを舟の綱手くるとあく とめかれぬ色にとる早苗哉

4 多 類 者 流 驚 利 能 條 三五五
うへわたす田面ミレハはるくくと 早苗は水のみとりのミして
※伊・日・公…をみれば ※2伊とのこして

5 王 多 類 奈 乃 者 流 利 爾 可 那 網
植わたすさなへの末ハはるくと 空もみとりになひく色かな

6 登 利 者 多 奈 留 房
とりはこふ早苗ハつきぬたねなれや うふる田面の水ひろくして

7 利 乃 那 衣 留 和
とり残すこのひと町の初苗も 田子のでまなき程そみえぬる

8 具 乃 能 留 登 留 仁
いく里の田子のもろ聲くるしまて とる手につきぬ早苗なるらん

9 登 留 可 王 能 志 留 利 奈 親
とるからにわさ田おくての秋やしる ひとつみとりの水のさなへも

10 以 具 可 可 須 志 遣 早苗もしけし筑波根のかけ
今日いくかこのもかのもにうへ渡す

十一日 寒草少 38 夏・冬の8

1 何の色も思ふにはやく忘れ草 おふてふたねそ霜につれなき 孝 連 奈 起
津連 奈 乃 遠 多 可 遠 霜にのこれる草の一むら

2 つれなさの色をやたのむ松かけの 霜にのこれる草の一むら 綱
霜の後かハらぬ木、の色ハあれと 冬枯のこる草そまれなる 房

3 志 多 天 利 尾花かもとの霜枯の比 仁
したひても焔をやひとりおもひ草

4 冬枯の一村薄ほに出し いろをのこしてをけるしもかな 宣
かれはつるたねやミなからおもひ草 尾はなハ残る一本のかけ

5 布 可 川 乃 爾 条 八五五
ふかゝらぬ霜もやうつむ冬草の あるにもあらぬ庭の寒けざ
※伊・き(さ敷)

6 冬草のハつかにミてかかけろふの もえし春野も哀とハしる 親
草ハミななれ野(野衍)の霜の花すゝき なひくともミぬ色もさむけし 敦 一三八三〇六

7 初春ハ一二葉の草の原 残るもおなし冬かれのころ 和

8 和

9 和

10 和

十二日 嶋夏草 39 夏・冬の9

- 1 夏草^能の野しまハ波^{乃者那}のはな^{可遣}の露^{可遣} かけて涼しき色や知らむ
- 2 玉^{可累}もかる汀^里の舟^{可累}もみえわ^{衣王可}かて 野嶋^可か崎^{志遣}にしける^{奈川}なつ草
- 3 夏草^乃のま^{可起可}かき^{可起可}嶋^可ハ涼し^{多衣春}さも たえ^可す浪^可の露^可か、るらん
- 4 浪^{乃者那}のはな^里ハありもあらずも夏草^可の 野嶋^{可起}かさき^可に秋や待らん
- 5 秋津嶋^{本可}ほかの国^{奈遣}までなひ^可けとや 君^可かめく^可ミ^{遣留}にしける^可夏くさ
- 6 ほ^{本王}しわ^{留多}ふるた^能ミの、嶋^能の夏草^能に 浪^能の露^能そふ浦風^能のこゑ
- 7 船^{奈可}なからかる人^留ならし河嶋^乃の 水^乃のみとりもふ^利かさ^{留可}なつ草^奈
- 8 夏^乃の日^能のな^可かき^{利遣}限^可りをミ^満しま^{留可}菅^{留可} 水^{留可}の緑^可も茂^可る^可かけ^可かな^那
- 9 浪^留よする野嶋^留にふ^可かき^可夏草^乃の 露^乃を涼^可しき色^{多留}にみ^{多留}たる、
- 10 さ^可さいてん花^連もこ^能そあ^能れ夏草^能の 野嶋^{可起}かさき^留ハもる^奈人もなし

孝 綱 房 和 宣 敦 條 仁 親

※日とも(に(朱書)

一三九三〇八
四一五

十三日 江寒廬 40 夏・冬の10

- 1 冬枯^奈ハなにハの^{乃能}色^阿のよしあしも わ^可かすよ波^乃の音^{可利}ハかり^亭して
- 2 な^能にはえやあし^{本春}のほ^可すゑハ霜^可かれて 浪^連こそこゆれ浦風^可ぞ吹
- 3 霜^{布可起}ふかき入江^乃のあし^{遠可遣登}を^可かけ^可とのミ 頼^{万能}むもあま^留のミるめ悲^可しき
- 4 冬^{布可}ふかき^奈なにハ入江^乃の霜^可枯^尔に か^可こふかき^本ほも^可うすき^可芦^可の屋
- 5 な^能にはえ^乃の^可芦^可のかれ^者はや^{津具}ミをつ^可くし あ^阿さ置霜^可のふ^可かき^{志留}し^尔るしに
- 6 枯^{多留}わたる入江^者の^可芦^可ま浪^可は^可れて 寒^多き^留さ^留き^留に^留た^留てる白鶴
- 7 夜^可を^可かせ^年ね入江^乃の水^可も^可かれ^可くの 氷^尔にとつるあ^留しのむ^多らたち
- 8 な^尔にを^可その思^世ふえ^可にせん^可芦^可の葉^可の 冬^可枯^可さむ^可き汀^可かく^可れは
- 9 な^奈にハ人^{可利}かり^可残^可しても霜^乃枯^能の 入江^能のあ^可しの^可かけ^{奈起}そ^可すく^可なき
- 10 風^奈なら^尔て波^留に^留やさ^留ハる難^尔波江^須や 霜^尔にお^連れ^能ふ^能すあ^能し^能の下^能葉^能は

孝 綱 房 和 宣 敦 條 仁 親

一四〇三〇
八五八

十四日 月前郭公 41 夏・冬の11 欠…三条西公條

- 1 おりし^里みもあれ^連月ならすとも待へ^奈きに^尔 さそ^佐はれ出し^本山ほととき^須す
 - 2 夜^留るは又都^尔に出て^天ほと、き^須す 山路^乃の月^尔ハ稀^留にみるらむ
 - 3 陰^多たかきまつをつくして夕月^尔に^本 ほのか^多たらふや^屋やま郭公^万
 - 4 い^連つれをか^可まてともい^多ハん霍公^耳 かた^具ふく^留月にすく^一る一聲
 - 5 時鳥^奈人もな^可かてや過^奈なまし 面影^勢のこ^利せあり^乃明の月
 - 6 く^奈まもな^尔き月にな^乃く夜^乃のし^志のひ^能音^遠を^可 い^可か^多にと^思ふ郭公^可かな^奈
- ※私一四…くまもな^はき月にな^つく夜^この忍^ふひ音^しは^のい^ふか^にと思^ふは^とき^すかな
 ※私三二三…くまもな^さき月もい^さかにと忍^ひ音^をを^なく夜^はおも^ふ時鳥^{かな}

三条西公條

※称三三四…ふかき夜に聞忍ふなりほとときす月みぬさとはきかずやあらまし

十五日 雪朝遠樹 42 夏・冬の12

- 1 つれ^徒なさもあらそ^可ひかねて冬^乃されハ 槇^志の葉^多しろ^能き雪^朝明
- 2 た^多くひな^奈き河邊^雪のあ^可さかし^王わ ぬ^留る夜^遠をた^可れか^多おき^出てみ^ん
- 3 山^乃もとの梢^雪のあ^可さから^須す みる^留人しも^志や思^ひう^連られん
- 4 た^連れかへ^利り風^乃や^可らふ雪^にけ^さ かけ^可あら^留ハる、嶺^乃の松^可かえ
- 5 あ^阿すや又^春高^尔ねの^満色^里に^奈まさ^乃りな^麓む 麓^乃の松^今朝^のう^す雪
- 6 い^徒つか^乃日の^尔光^天に^毛み^留えて降^もる 雪^奈にお^起く^農なき嶺^原の^奈奈
- 7 さ^佐え暮^津し遠^毛山^利松^留ハう^亭つも^今れ^朝さ^多た^可かな^那る雪^色の^可奈
- 8 降^津つも^留る色^利よりも^今朝^うす雪^に 秋^能の葉^さむ^き遠^の山^本
- 9 か^可へ^利り見^留る名^連残^也も^今朝^の雪^よふ^可かく^{いて}、宿^尔の梢^に
- 10 朝^本ほ^らけ尾^上の^奈ハ^能きの^ふみ^ぬ 峯^可をか^年さ^ねて^留積^る白^雪

※高・日・伊…お

敦 一四二三一五
 ※お 驚 日・伊・私…お

十六日 雲間郭公 43 夏・冬の13

- 1 ほと、きす本かさなる雲可を留しのき、て乃 くるしき程の聲留を聞ゆる留
 - 2 なくこゑも雲乃のおくなる郭公留 すむ山春ふかき心可をそしる
 - 3 ほと、きす本こゑに須ほひ尔やさく花の 白雲留かゝる山をいつらん
 - 4 郭公可あかぬ名残利ハなをさりの 心の空乃のへたてともなし多
 - 5 一こゑハ雲乃のいづくも聞わかつて 心満まよハすほと、きす本かな可
 - 6 ほと、きす本鳴須にし空の名残尔とて 心も雲乃の行衛ゑとそなる累
- 「空白」(右頁以下なし。左頁もなし。次頁の右頁三行ほどなし)
 ※高：同様。伊：「空白」なし。「此間闕不審」。日：「空白」なし
- 7 時鳥可それかとハ可かりし可ら雲の こなたかな多たにた多とるこゑ堂かな流
 - 8 あけほ遣の、雲本の外留なる郭公 一聲奈なからさ可たかにそ多きく
 - 9 うつ津もる、鳴毛ね年なり利せ可はいかならん 雲可かさな奈れる山郭公累
 - 10 雲の上にさ多たかに可きかむ時鳥可 を遠よハぬ空乃のなく奈ね須ならすハ

為 貞 公 永 雅 秀 親 仁 孝
 一四三三六 三二五 ※日：空(雲カ)

十七日 雪中待人 44 夏・冬の14

- 1 ふみ婦分てとひ人こ乃人の心遠をハ 今朝布ふる雪留にまかせて可を遠ミん
- 2 ミせ者はやと人可を待个まにけふも又 ハラハぬ木、の雪折乃の声
- 3 とへ登かしな雪奈のしら山能遠可からす 思屋ひやらる、よもきふの宿
- 4 とハれ棟ねハ心の枕川もうつも亭れて 雪可かきくらす今日須のさ能ひしさ
- 5 下おれ連の音乃のミ多たて、とひもこぬ 人連うつれなき姿奈のしら雪乃
- 6 山見すみの心もみえて友天を待遠 雪も梢乃のし志ほりし里つらむ舞
- 7 しらせ志は者はい以かに可つも尔れる白雪も とハ、たえ登しの道多の往來能を遠
- 8 道奈なしとかこともとめハ庭乃の雪毛に つもらぬさきにとふ人可も奈かな
- 9 またす多ともこてふに似尔たる庭多の雪留に 消奈なんまてと人可やつれなき
- 10 とふへき遠をとハれや春するとし留ら雪の ふかくハ誰婦を可まつた遠のむらん川

敦 條 宣 綱 房 親 仁 和 孝
 一四四三一九 ※私：問らん ※日：の力

十八日 雨後郭公 45 夏・冬の15

- 1 時鳥奈なく木可かくれハ村雨乃の 名残遠の露多をなみたに可やる
- 2 晴天て猶夜遠をのこさすハ雨乃の内に きかえやあけん山時鳥氣
- 3 時鳥かことかましく今そとふ さハらし物乃の雨春をすくして具
- 4 雨晴天て猶袖ぬらすほと、きす なくハなみたかタくれの空奈
- 5 村雨ハ過行雲乃の山の端尔に またふりいて、なくほと、きす多
- 6 むらさめのこれ能も名残可かほと、きす た、一聲堂のさためなくして奈
- 7 一とをり里利わく程王の村雨遠を をくりてやなく山ほと、きす利
- 8 降はる、雨留の名残乃かほと、きす 声具きくからに袖遠の露けさ
- 9 晴行可か窓津うつ雨ハ音天もせて 空尔にまきれぬやまほ、ときす屋
- 10 一とをり過ぬる雨利のおりしもあれ 空たのめすな山時鳥奈

敦 一四五四二
 條 三七
 宣
 綱
 房
 親 ※伊：お
 和
 孝
 仁

十九日 雪中興遊 46 夏・冬の16 原本は竹内文平所蔵文書（東京大学史料編纂所）

- 1 かへる漏さも忘れ毛かねてとくる、野に けう个をさ可かする雪留の花可かも
- 2 庭尔にミる雪流の朝能のあかなくに 又駒乃なめていつる野可へかな那
- 3 春秋遠を思春ひすくしてな奈かむれハ また一ころの雪多のはな園能
- 4 誰多をまたとふとはなしに思奈ふとち 船登さしてミむ今朝能の白雪
- 5 うちいつる雪留の末野天に駒天なへて みれハとふへきやとも忘れつ連
- 6 はなとめて月満とまかへてくる、日に あかぬ心可そ雪徒につくせる世
- 7 とハて又たち帰多る波留に船耳さすも 心盤はしるやけふ个のしら雪乃
- 8 花耳にめて月尔にむかふもさむからぬ 雪尔とそ人にひ可かりそへぬれ連
- 9 ふるをのミあかぬハ布かり留かもろ共に 雪遠をめくらす袖頻の色々奈
- 10 門盤は猶明留る夜遠をそし遠くこし 宿ハ伏見乃の雪尔の朝に

和 ※伊：日：ハてねと、高：かてねと
 仁 ※伊：なへて
 敦 一四六三三二
 條 九七二
 宣 ※原：とめて
 綱 ※伊：と見て、※2伊：も
 房
 親 ※伊：みて
 孝
 仁 ※伊：高：列：お

廿日 五月雨晴 47 夏・冬の17

原本は京都国立博物館B甲九〇九（四居盛氏寄贈）

- 1 五月雨の程ふる空に馴きつ、今朝はまはゆき日の光かな
能 本 能 可 奈
2 木のまより空の緑もほのみえて 五月雨ハる、太山への里
利 本 衣 留 乃
3 五月雨ハ雲の衣のひまみえて うらめつらしき月のゆふ風
乃 衣 農
4 雲ハまた帰るともなき山風に 晴間をミする五月雨のそら
多 奈 留 須
5 五月雨ハなをいかならん雪水を はこへる程の晴間なりせハ
越 可 奈 遠 者
6 見もなれぬ日影を吠る犬もあれや 五月をくらす雨の晴まハ
奈 遠 須 能 万
7 五月雨の晴まの夕日めつらしと むかふにあつき影も忘れて
可 尔 川
8 山のはも今朝あらハれて五月雨に かさなる雲の晴間をそミる
乃 者 那 能 遠 留
9 ふりくらす雨ハ五月のならハしに たのまぬ雲の晴まなるらん
布 利 須 奈 多 奈 留
10 あふち咲五月の雨の晴間より みとり涼しくかよふふかせ
阿 能 利 見 可

條 三八四
※伊よりも
宣
綱
房
親 親
※伊とも
敦 一四七三四
仁
孝
和

廿一日 千鳥曉鳴 48 夏・冬の18 欠：武者小路秀房

原本は思文閣墨跡資料目録四三二号

- 1 さ夜千鳥ゆふつけ鳥にあまのとの あくるもしるく聲あハす也
氣 能 留 毛 志
2 ふな出をも今やと思ふあかつきの 塩にひかれて千鳥鳴くなり
那 阿 可 尔 可
3 いそ枕うきねの波のねさめをも よそにかたらふ友千鳥かな
遠 所 尔 可 多 可 那
4 友なしとおなし波にや浦ちとり われも独のね覚とふらん
奈 那 尔 利 連 乃 棟
5 猶残る有明の月をしたふ夜や 雲のなミにもちとり鳴らむ
乃 遠 志 多 奈 毛 利
6 あまのすむとまやに近く鳴千鳥 をのか友とやね覚問らん
万 春 尔 遠 可 棟
7 真砂地やあやめもみえぬ明くれに 友よひかハし千鳥鳴なり
阿 免 衣 尔 可 利
8 きくからにね覚かちなる身のうへを 思ふも夢の友千鳥かな
可 棟 留 能 遠 能 可 那
9 妻やとふわかれや思ふ浦千鳥 鳴音にたへぬ有明のそら
可 堂

條 八九一
宣
綱
親
知
和
孝
敦 一四八三七

※原本では、3と4の間に
以 具 尔 春 幾
いく浦の月にすきて有明の まくらの波に千とりなくらむ 秀房

廿二日 照射 49 夏・冬の19 原本は大東急記念文庫「集古筆翰」第一輯

1 秋ならぬこれも思ひかたつ鹿の^可 ともしのかけにまよふこゝろは^奈 網

2 五月山木かくれやらぬ心をも^可 ともしの鹿におもふかなし^奈 親

3 あけやらぬともしの影もしめるらし^志 木のしたふかき宮木の、露^多

4 あはれなり^利あふにしかへハとハかりの^可 ともしに鹿のよるのおもひハ^留 敦 一四九三二八

5 ともしするは山しけ山忍ひつゝ^留 ねにたにたてぬ鹿や行らん^奈 宣

6 山ふかミ^{布可}ともしの鹿もこの此と^能 まつ夜になれハ明やらぬ空^屋 仁

7 あけぬ也^{登毛}ともしの影も白妙の^能 袖まきあけて帰るますらお^留 條 四二四

8 夕やミは^{盤毛}ともしのほくしほのかにも^{本乃可} いかになつ^{以可}おのねらひすらしも^奈 和 ※原を(越)

9 心なきさつおの袖も^毛としして^{志天} かりしく柴の露やか^可えらん^里 孝 ※伊…高・日…原…へ

※原本では、1と2の間に
王可徒 毛乃可連
わかつミものかれぬ鹿のむくひもや^可いと、は山のとしさすかけ^可 秀房

廿三日 網代 50 夏・冬の20 欠：貞敦親王

1 風さゆる夜な^留いかに身をうちと思ひ侘てもあしろ守らん^{以可} 網

2 白妙の袖の雪霜かさねては^乃 猶さむき夜と網代守らん^可 房

3 川浪の帰りも見すやあしろもり^利 よりくるひをの哀なる世を^留 親

4 かりハつる田上川のあしろ守^可 露しくとこや秋にまさらん^志 宣

5 あたりまでこほりはてたる川風に^{多利} よりくる浜ハひをにそ有ける^留 條 九二二

6 うちもねす波のよる^{奈春}袖さへて^乃 もるや網代の宇治の川長^天 和

7 影やとすあしろの床のあれまくも^須 おしとや波の月ハもるらん^留 孝

8 網代守よ床さえ行河風に^衣 さなから袖も浪やこゆらむ^{奈可} 仁

9 もるわさもさそなあしろの床なかに^留 せんかたなみのよる^世の^可声^{多奈能夜留}

貞敦親王
※私一〇五・三三八 河風を身にさむしとおもはてや 暮る夜ことにあしろ守らん

廿四日 鵜河蛭 51 夏・冬の21 欠：武者小路秀房、冷泉為和

- 1 鵜舟さす河瀬の波にかゝり火の 可利能可造多可那 かけをあまたに飛蛭かな
- 2 飛ぼたる鵜ふねのかゝり川風に 本多留年乃可利尔 ひとつおもひにみたれてや行
- 3 鵜かひ舟さすや川瀬の篝火の 可乃乃 を 遠連毛衣 のれももえて飛蛭哉
- 4 もえて行蛭もわかぬ光かな 天可可那 とをき鵜ふねのよるのかゝり火
- 5 後の世のやミはてらさし鵜飼船 乃屋盤 かゝりの影ももゆる蛭も 可利毛留
- 6 う舟さす波にみたれて行蛭 頻尔多亭 これもやミちをなにしたふらん
- 7 瀬々にたく波の鵜舟のかゝりにも 堂乃乃可利尔 ひかりハこえて行蛭かな 可奈
- 8 みたれゆくほたるハ空にのほる瀬の 本多留本留 う舟のかゝり影 能可利 ぞ 可留 わかる、

綱

親

※伊：の

敦 一五二三三二

※私：に。 ※伊：お

宣

仁

條 四三六

孝

※伊：ハ

廿五日 狩場霰 52 夏・冬の22

- 1 鳥の霰も雪とつもらハミゆへきに 登津毛 み 尔 それに 多須可利可那 いたす 可利 かり衣かな
- 2 かり衣猶ほしわひぬ雪ならハ 可利本王奈 はら 者 ハん袖に雨もましりて 尔利亭
- 3 狩くらしハし立より陰たにも 志利多 うたの、ミの 多能尔 にみそれふりきぬ
- 4 みそれふる狩はの 見布留者遠能 をの、くる、日に 留 空き限りを 利遠津留 つくる山風
- 5 吹まよふあらしや袖にさむからし 尔可 みそれふる野 留可利 にかへる 可利 かり人
- 6 雪に雨ふるはみそれか袖の上に 留盤乃耳 ハら 留 ひもあへ 春留可利 すぬる、かり人
- 7 風あらくみそる、そらに狩人の 留尔 帰る 留利 やとりのいのちなるらん 奈留
- 8 狩人の袖うちぬれて山かけハ 乃連天可 鳥たちもよそにみ 多 それ 布留 ふる也
- 9 山こえハ雪にやならんはし鷹の 尔奈者 すゑの、原ハ 能 みそれ 布留利 ふるなり
- 10 一とを 利 りみ 利 それの空の雲風も 利 さ 可利 ハ 利 かりハ鳥や立つらん

條

九七六

※日：跡カ。 称：あじ。 ※2日・伊：称：くらす

親

敦

一五二三三四

宣

仁

房

和

綱

孝

※列：狩場

廿六日 杜蟬 53 夏・冬の23

- 1 露をのミをの^{遠乃可}か^{屋利}や^登とりと鳴蟬の^乃心^志しらるゝ^{毛利能}もりの木^可ふか^さ
- 2 置露も^{こぬ}か^可けてう^川つ蟬の^奈なく音^留くるしき杜^能のした^{多可}か^遣
- 3 鳴せミの聲もや袖をぬ^春らすらん 夕露お^{徒留毛利能}つるもりのした道^多
- 4 夏^乃の日は^盤もりの梢^可か^奈くれなき いつく^具の霧^尔に蟬の鳴らん
- 5 蟬の聲涼しくもある^{留可}か風^{布可}ふかぬ 森の木葉も^{可利}うこくハ^多かりに
- 6 ぬ^{連天奈}れてなく心^志そしらぬ霧^{婦可}ふかき 杜^乃の木^{可遣能}かけの蟬^多の羽^多ころも
- 7 烁^可ちかミ梢^志しくて鳴蟬の^天な^奈ミ^多たくる^{留本毛里能}ほ^多もりのした露
- 8 し^{志个利阿}けりあふ梢^{奈可}な^尔からにせ^能ミの聲 袖^{尔盤}には杜^多のした風^多そ^可ふく
- 9 夏^留なしと立^乃よる杜^能の木^能のもと^にを^連のれ時^{世能}しる^能せ^能みのもろ聲
- 10 吹^留出る杜^乃のした風^{多春}すゝ^利しきに 蟬^留の鳴音^多そ^多ひとり^多くるしき

親 敦 一五三三六
宣 伊…もカ
條 四六三
房 伊…もカ
知 伊…もカ
綱 伊…もカ
孝 伊…もカ
仁 伊…もカ

廿七日 神楽 54 夏・冬の24

- 1 雲^乃の上^多にう^能たふや弓^春のもと^多すゑも 神代^{遠可}をか^春へす道^多のたゝし^さ
- 2 もろ人^徒のつらなる袖^{奈留}も白妙^尔の 月^遠にあ^能け行^多あさくら^多のこゑ
- 3 星^多うたふ聲^{本利}すミのほ^流り^尔ふくる夜^留に 明^累る岩戸^遠のためし^多をぞ知
- 4 ふ^布けにけり吹^{尔遣利}よる風^留も榊^尔葉^遠に 霜^留をき^多ぞ^留ふる笛^乃竹^多のこゑ
- 5 天^者の戸^{可多}もは^{可多}や明^可かたのさ夜^可かくら 霜^遠をか^留さぬ^{遠可}る袖^多をか^多へして
- 6 宮^津つこ^可か庭火^志しろくもゆ^可ふかけて とる^{登留}や榊^乃のもと^多末^盤の聲
- 7 神^可やしる猶^{可多}久^多かたの雲^多の上^多に う^多たふも星^能の霜^通をへ^盤ん世^多は
- 8 ふ^希けゆけハ庭火^尔のま^多へに星^多うたふ 神^尔の心^春も空^能にす^留むらし
- 9 神^留遍^留とるも^乃うたふも榊^乃葉^可の さ^可かゆく世^能をや^留まつい^能のるらん
- 10 八度^{婦可}置霜^可夜^多もふかしこゝに^多ます 神^乃のミ^能ま^能への榊^能葉^多の聲

敦 一五四三八三
宣 伊…もカ
仁 伊…もカ
條 九八九
房 伊…もカ
和 伊…もカ
親 伊…もカ
綱 伊…もカ
孝 伊…もカ

廿八日 夕立 55 夏・冬の25

- 1 時のまにくれぬとミつる山のはに 留 者 いり日をか 可 春 へす夕立の跡 乃
- 2 なる神のと、ろく空の雲風も 留 けしきことなる夕 多 たちの雨 那
- 3 晴ぬれハさもあらかりし山風の 連 乃 木末ともなき夕 奈 多 たちの跡 起
- 4 なへて先くもるとハなき夕立の 天 留 ふりくるかたに 利 留 可 多 きほむらくも 本 毛
- 5 夕立に風ふきたて、道のへの 尔 堂 塵もさながらくもる空かな 留 可 那
- 6 降くるも半天わけて夏の日の 留 王 乃 能 くもりくもらぬ夕立の雨 毛 利 乃
- 7 すゝしさハミるに程なき夕立の 留 奈 雲のゆき、や又かハるらん 乃 留
- 8 吹をくる風を涼しとみるか内に 遠 流 留 可 尔 やかてふりくる夕立の雨 可 布 利 留 農
- 9 夕立の雲の遠山かすかにて 能 乃 可 須 可 尔 おきつ舟人蓬おほふなり 川 利 於 本
- 10 引かつくすけの小笠の世ハしきに 可 具 春 遣 乃 衣手ぬる、夕立のあめ 留 乃

和 親 綱 孝 仁 房 宣 敦 條
四五三 一五五三四一

廿九日 佛名 56 夏・冬の26

- 1 数々のつミも残らしとなふるに 能 徒 登 奈 ミ世の佛をひとつ心に 乃 遠 尔
- 2 となふるや佛も世々に過にける 那 留 尔 个 流 その名をしたふ年の暮哉 遠 志 多 能
- 3 ミ世かけて佛の御名をとなふるも 可 乃 越 奈 留 心ひとつの道にありける 尔 利 个 留
- 4 かくとでも思ひよるへき身ならずハ 留 奈 佛の御名をいか、きくへき 乃 遠 可
- 5 となふるなるミ世の佛にひとせの 登 奈 留 尔 乃 夢のまよひハやかてさめにき 尔
- 6 おこたりしミ世の仏の御名を今 多 利 乃 となへつくしてくる、年かな 奈 徒 流 可 那
- 7 もろ人のなのる聲をハ唱をく 乃 能 留 遠 ミ世の佛のほかにくかな 乃 本 可 那
- 8 となへをくミ世の佛にたてまつる 奈 遠 乃 尔 多 累 花もそれかとれる白雲 可 可 奈 留
- 9 ミ世かけてとなふる御名も雲の上 可 奈 留 能 ひろきめくミにためしなるらん 孝 奈 留
- 10 数々にとなふる御名も雲の上 奈 ミ世の佛に三夜をかさねて 乃 耳 越 可 天

和 親 綱 孝 仁 房 宣 敦 條
九九五 一五六三四二

卅日 曉蚊遣火 57 夏・冬の27 欠：知仁親王・貞敦親王・冷泉永宣

- 1 よひの間ハ立出てす、む里人ヤ 曉^可かけてかやりたくらん^多
- 2 あり明の月につれなき煙こそ ね^称ぬ夜のしつか蚊遣なりけれ^奈
- 3 明やらぬ空たにつらき下もえを 猶^乃いつまでの宿のかやり火^可
- 4 山人はいさふししハのあくるまも たつる蚊遣や思ひなるらむ^奈
- 5 かけしめるしつやの蚊遣たきそへて 曉露の袖やはすらん^本
- 6 残る夜の光もうすし蚊遣たく 煙^乃のすゑのあり明の月^農
- 7 かやりたく夜のまほとなき枕かな 小篠^可かりふくしの、めの宿^志

和 親 綱 孝 仁 條
四四六

貞敦親王

※私一五七：よそは、やあくる光もかやり火の 煙にわかぬ小屋のうち哉

※私三四四：あくる夜の光もかわす蚊遣火の 煙にわかぬ小屋のうち哉

五月一日 深夜埋火 58 夏・冬の28

- 1 小夜ふかミあたられ桜のほたくへて 春めきわたる埋火のもと^多
- 2 深にけりいまハとねんもうつミ火の 光ハ夜半の霜よ氷よ^能
- 3 埋火のひかりもよハ、なるまゝに つけぬる夜半の程そしらる、^志
- 4 つけぬるかあかぬハ老の世かたり きゆるもしらぬ埋火のかけ^能
- 5 ふけハて、光すくなき今よりや 夜ハなからんうつミ火の本^津
- 6 思ふかひなきになしてもふかき夜の 月をそむけてむかふ埋火^可
- 7 寒き夜の更るもしらす埋火の あたりのまとゐあかぬ心に^尔
- 8 閑寒ミねられぬまゝに夜をふかく おこしてむかふ埋火の影^能
- 9 ふけてこそ猶寒き夜の闇の中に 影うすくなる埋火ハうし^奈
- 10 灰しろく残るをミレハ更る夜の 星ハかりなるうつミ火のもと^乃

和 親 綱 孝 宣 仁 條 房 敦
九八二 一五八三四六

二日 貴賤夏祓 59 夏・冬の29

- 1 川波の高きいやしきなそへなく 御祓になかす瀬々のあさは
2 御祓川神ハわかすやなかれてハ にこりの末とくたる身までも
3 いやしきも世のかへなみの御祓川 なかすやあさの袖のゆふして
4 さまゝの程につけたるねきことも 神やたゝすの御祓なるらん
5 あらそハぬ花のかけをも御祓川 ましハる道におもひハてぬる
6 神ハその人の上つ瀬下つ瀬の 御祓もおなし波にうくらん
7 なへて世の程につけてはしらすその うきせもありと御祓しつらん
8 誰ともうき瀬やけの御祓川 おなしなみなる人ハなけれど
9 人なみにしるもしらぬも身をいのる 今日御祓ハいく瀬なるらん
10 そのしなもわかぬハけふの夏ハラへ 百官の身はかハれとも
- 和 親 綱 孝 宣 條 敦 仁 房

三日 都鄙歳暮 60 夏・冬の30 欠一人：貞敦親王

- 1 あまさかるひなのなか路を行としも 都よりこそかとしてしにけん
2 海山のいつくにとまる年もあらハ 都の外も行て見ましを
3 暮にける年もしられて御調物 都にいそく民のゆきかひ
4 かはらめや都の外のみすまゐにも 春のとなりの事しけき世は
5 道しあれや都の外にいつくにも 暮行としの関守もなし
6 くれけりと今日は都の人なみに かたつゐなかもおしむ年かな
7 つもりそふ道を思へハ雪ふかき こし地は先や年の暮なん
8 いなしきの道もさりあへぬ往来にや 宮こにくるゝ年もミゆらん
9 春をまち年をおしむハいつれそと 都の外の人にとハゝや
- 和 親 綱 宣 秀 條 孝 仁

貞敦親王
※私五一三二六〇：なすわさのその国ふりにかはるとも みやこに暮る年やゆくらむ

四日 寄月戀 61 戀・雑の1

夕月の夜をへてまるる影はあれど 猶見るたびのなずらへやなき
我なみたなかむるたひにおちゆくは 月にいかなるおもひそむらむ

御製
貞敦 一六一三五二

とはぬをば思ひすつも雨の夜の あくる眼をいつとかまたむ
はれやらぬ思ひを袖の涙こそ 我身ひとつの雨にふりけれ

御製
貞敦 一六七三六五

五日 鐘聲何方 62 戀・雑の2

里ありとゆふつけ鳥もなく夜半の 鐘をいづくに聞きか定めむ
その山とき、もさためす更る夜の 風につる、鐘のひ、きは

御製
貞敦 一六二三五四

もりすていでていなばや稲筵 つゆけさまる雨のゆふべは
あはれるなる田面の庵の夕かな た、雨露のもるにまかせて

御製
貞敦 一六八三六六

六日 寄風戀 63 戀・雑の3

われを人花さそふ風に厭ふとも 散らすばかりの浮名おほすな
吹風のたよりありともいか、せん こ、ろことの葉つたへやらすは

御製
貞敦 一六三三五六

立ちそひて消えむといひし煙こそ なほもえまさる思なりけれ
人心なひきもはてはゆふけふり たつ名もなにか思ひとはせん

御製
貞敦 一六九三六八

七日 松風入琴 64 戀・雑の4

松をその知る人にして琴の絲も たたじやおなじ風のしらべに
松に吹風はいつよりひく琴の おなししらへをうつしきぬらん

御製
貞敦 一六四三五八

山かけてすむかけならし夕煙 たえだえ見しはくものにのこりて
山深くすむ身しられて朝夕の 心ほそさを煙にそみる

御製
貞敦 一七〇三七〇

八日 寄雲戀 65 戀・雑の5

かひなしやたなびく雲の立居にも 我が中空にこふるばかりぞ
ゆくゑなき契りのすへに雲たにも わかある山をたのむ夕に

御製
貞敦 一六五三六〇

うち出でていつ一こともいはせ山 谷のした水むすぶばかりに
うらみのみ大江の山のさねかつら くる夜もなくは中やたえなん

御製
貞敦 一七一三七二

九日 雲浮野水 66 戀・雑の6

ひととせやうつる野澤の春のみづ 夏の雲ゆくみねもさだかに
野を遠みなる、水の一すちに うかへる雲もつれてゆくみゆ

御製
貞敦 一六六三六二

こし方のせめて見ゆやと行く先に あらぬ山路をよち上りつつ
帰りみてこゆる山路の雲風も 都の空にのこるおもかけ

御製
貞敦 一七二三七四

十日 寄雨戀 67 戀・雑の7

十一日 田家暮雨 68 戀・雑の8

十二日 寄煙戀 69 戀・雑の9

十三日 遠村煙細 70 戀・雑の10

十四日 寄山戀 71 戀・雑の11

十五日 山路旅行 72 戀・雑の12

十六日 寄野戀 73 戀・雑の13

憂くつらきをりふしことの言の葉や 夏野の草に繁さまされる
秋といひて色かはりゆく心をは 野への浅茅にいつならひけん

御製
貞敦 一七三三七七

十七日 原上旅宿 74 戀・雑の14

一夜かるまくらもあり露けしな 小野の篠原しのにみだれて
古郷をしのふか宿の草まくら 露もみたれてみる夢もなし

御製
貞敦 一七四三八八

十八日 寄浦戀 75 戀・雑の15

こと浦につひによるとやあだ波の わが汀をばとほざかりゆく
此まゝにさてやくちなんあふことは かけてもしらぬ袖の浦波

御製
貞敦 一七五三八一

十九日 湊頭旅宿 76 戀・雑の16

すむ月のかげの湊のとまりふね なほこぎいでむよるの波路を
いかならん夢かはしはしみなどふね うきねの浪のよるの枕に

御製
貞敦 一七六三八二

二十日 寄柚戀 77 戀・雑の17

いかさまにおもひ入りけむ柚山の 山口しるきなげきのみして
つれなきにこりもはてなていつまでの みをの柚山なけきつむらん

御製
貞敦 一七七三八五

二十一日 山家人稀 78 戀・雑の18

すみつかむ程はみ山も尋ね見よ 友とする人ひとりふたりは
をのつから鳥獸をともとして 身をおく山に人は音せぬ

御製
貞敦 一七八三八七

二十二日 寄關戀 79 戀・雑の19

わりなくも戀路におほき關なれや 人目の外になこそともいふ
相坂の名をこそたのめこえやうて へたつる中の関守はうせ

御製
貞敦 一七九三八八
※と思へば(イ)

二十三日 潤戸鳥歸 80 戀・雑の20

朝な夕ないづくに出でて歸るらむ 鳥のこころのあさき谷かな
谷の戸にゆふへをつくか音つれよ みねこそ雲に鳥歸る声

御製
貞敦 一八〇三九一

二十四日 寄松戀 81 戀・雑の21

涙のまいふかひなくて松の葉の しるびにおつる心をぞおもふ
よそにても木すへはみすや軒はなる 松の心をとふくれもかな

御製
貞敦 一八一三九二

二十五日 夜鶴鳴阜 82 戀・雑の22

この夜半やふけゆく空に澤水の すめる聲してたづぞ鳴くなる
月清み沢辺の水にゐる鶴の かけをも友と夜半に鳴声

御製
貞敦 一八二三九四

二十六日 寄杉戀 83 戀・雑の23

今は身をまたもあひみむちぎりかは 人のこころの二もとの杉
かはらしといか、心のおく山に たつやむすきをしるしとやせん

御製
貞敦 一八三三九六

二十七日 暁猿叫峽 84 戀・雑の24

ましらく山下水にありあけの かげはそらなる月としらずや
たき落る山のかひよりなく猿の 心しらるゝあかつきの声

御製
貞敦 一八四三九八

二十八日 寄竹戀 85 戀・雑の25

風の音にひとりぶしてわが宿の いささむら竹人だのめなる
今みるもかはらぬ色を契るとや なみたそめをく竹の一もと

御製
貞敦 一八五・四〇一

八重葎つゆのみふかし待つ人に いつか玉しくくれもありけむ
ひろひをきてみせはや人に片糸の ぬきもと、めぬ袖の白玉

御製
貞敦 一九一・四二二

二十九日 江亭眺望 86 戀・雑の26

よせかへる音はうけれどおきつ波 みれば入江を宿のいけみづ
入江なる芦のむら／＼里みえて ゆふ日の波にかへる舟人

御製
貞敦 一八六・四〇二

よむふみの言葉のこりて燈火の かげをしばしと慕ふまどかな
小夜みはや明なるとする光こそ のこるにみゆれ窓の灯

御製
貞敦 一九二・四二四

六月一日 寄草戀 87 戀・雑の27

うちわびて今はわれもやわすれぐさ 人の心をたねとしてまし
我のみやしのふとはいふ草ならん 人はかくしもわすれゆく身は

御製
貞敦 一八七・四〇四

いかにせし夜のへだてぞ山鳥の はつをのがみ影もみえぬは
しらす今うつりはてにし心をは か、みのかけもとめすや有らん

御製
貞敦 一九三・四二七

二日 草庵貽夢 88 戀・雑の28

とにかくにみるや夢の間いつまでと 草の庵に世をつくすらむ
のかれきてすむ身は山の草の庵に うき世にかよふ夢そ残れる

御製
貞敦 一八八・四〇六

いつよりか塵もくもらでます鏡 さやけき霜をはらひかぬらむ
移りやすき月日おもへはますか、み おひとなるへきかけもはつかし

御製
貞敦 一九四・四一八

三日 寄葛戀 89 戀・雑の29

まちえてもなに一筆はみづくきの 岡の葛葉のうらみそふらむ
色かはる人の心のあき風そ うらみたちぬる露の真葛は

御製
貞敦 一八九・四〇九

おもへどもかひなきものかうす衣 かさねぬ袖にのこる人かは
唐ころもかへす夢路はわれのみを 人も心のかよふとやせん

御製
貞敦 一九五・四一〇

四日 林下幽閑 90 戀・雑の30

夕けぶり紅葉をたきし名残をや 木のもとずみになは残すらむ
陰しむる山は林のおくふかみ たえぬ落葉や道うつむらん

御製
貞敦 一九〇・四一〇

そらに知れわが世忘れて人の世を 思ふばかりはたれ思はまし
世中はたかうへとてもおもふこと かはらてかわるゆくへなりけり

御製
貞敦 一九六・四二三

五日 寄玉戀 91 戀・雑の31

六日 窓灯欲盡 92 戀・雑の32

七日 寄鏡戀 93 戀・雑の33

八日 對鏡悲老 94 戀・雑の34

九日 寄衣戀 95 戀・雑の35

十日 述懷依人 96 戀・雑の36

十一日 寄枕戀 97 戀・雑の 37

今ぞ思ふ後しの中にしるといふ 枕ばかりのかたみやはある
ひとりねのわか床とちにおもふかな いかに一夜の人の手枕

御製
貞敦 一九七・四二四

十二日 往事催涙 98 戀・雑の 38

見ても知れなみだに向ふをりふしを 言葉にいでぬ昔なりとは
つくくとおもふにおつるなみたかな きのはけふのむかし語りを

御製
貞敦 一九八・四二七

十三日 寄筵戀 99 戀・雑の 39

おもひやれくるる夜ごとの秋風は 身に狭筵のねむかたもなき
涙のみかたしきわひて諸共に ねし夜はしらぬ床のさ筵

御製
貞敦 一九九・四二九

十四日 社頭祝言 100 戀・雑の 40

波間よりあらはれしあともいぢるき 松がねいくよ住吉の宮
此国は神のさつけし君か代を いやつきくに守りおさめて

御製
貞敦 二〇〇・四三二